

第四回講義への学生のコメント

今回の授業の要点は、学生の意見で「社会的に価値のないものを愛好する人もいる」というものに対する返答で、「社会的に禁止されているものを愛好する人は処罰される」ということである。また、「犯罪が多発していることと、その行動が正しいかは別で、事実と正しいことは違う」ということも重要だ。

疑問に思ったことは、授業でも取り上げられていた男女間の地位格差だ。普遍的傾向として男性より女性の方が地位が低いことを、何故男女平等でないから正しくないとして、現代で議論するのか。この疑問に対する根拠は二つある。

まず一つ目は、身体能力や体力、精神的にも男性と比べて弱い女性が、昔から外で働けないのは当たり前のことだからだ。移動手段も発達していない時代は、根本的に働きにくいし、家事を代用する機械も少ないため、家を守る人が必要であった。その家を任されたのが女性であって、外にでていけないからといって働いていないわけではない。男性が需要が外の社会であるように、女性が必要とされていたのだ。

次に二つ目は、地位が低いことや、立場が弱いことを不平等で正しくないと思いつけるのは、間違っているからだ。男女がなにもかも同じように生きることは不可能だ。女性ならではの身体的問題や、妊娠出産のこともある。だから平等を基に何もかも男女同じようにするのは筋違いだ。また、女性の方が立場が弱いことを、その方が良いとする女性もある。古くからその傾向が強いおかげで、外で働かなくてよいし、仕事においてそれを利用できたりもする。

数が多いことや事実が必ずしも正しいこと(なすべきこと)とは限らない。というのも社会全体が過つ場合があるからだ。しかし、通常は個人の価値観や思いの「正しさ」を判定するのは社会的規範であり、社会全体が過っているときには正しい判定ができないこともある。このような状態のときに社会的規範を検討し、批判するためにあるのが倫理的理論だ。

上に述べたよう、数が多いことや多数派が正しいとは限らないため、哲学・倫理学では人間本性や論理、慣習、法などを根拠として「正しさ(なすべきこと)」を考察し、説得と合意形成を図る。したがって、考え方や価値観の異なる人に対して、強引に違う価値観を押し込んだり理解させる押し付けたりするのではなく、対話を通して相互の理解を深めるこ

コメント [y1]: この場合の「平等」は、「可能性(選択肢)の平等」と考えると分かりやすいでしょう。男性よりも女性の方が選択肢の範囲が狭いことが不平等だ、という考えです。たとえば、家事が好きな女性もいるし嫌いな女性もいるでしょうが、嫌いな女性も家事をする以外の選択肢がない。他方、男性は家事をしてもいいししなくてもいい、というのは不平等でしょう。あなたがこれから社会に出たら、様々な場面で、男性には許容されていることが女性には許容されていないことにぶち当たることでしょう。

「男性はこのようなもの、女性はこのようなもの」と決めつけてそれぞれの可能性を制限するよりも、男女にかかわらず、個人の能力や好みが十分に発揮される社会の方が、良い社会だと思いませんか？

コメント [y2]: 反対の立場も取りあげて検討しましょう。

とが必要になってくる。

今回の授業では前回の授業の復習と学生からのコメントに対する返答についてのものだった。具体的に言うと、価値観と正しさは別であるということや世の中には社会的に認められない間違った価値観もあるということを知った。また、個人の正しいと思うことと実際の正しいこととは別で事実と正しいことも違うということがわかった。例えば、犯罪が多発していてもそれが正しいことで**はあるとは思われていない**ということなどだ。そして、新しい話をきくとき、自分の常識を否定するような事実や主張について理解することが異文化理解、他者理解につながるということを学んだ。

そのため、私たちは自分の中の常識をたとえ否定するような事柄であったとしても積極的に受け入れるべきである。なぜなら、人からきいたことやネットで見たことなどあいまいな情報源から手に入れた情報などを正しいと思っている人も多々おり、その個人の持っている常識は常に正しいとは限らないからだ。また、多様な主張、事実を知ることによって、幅広い視野で物事を考えることもできるようになる。そして、その幅広い視野から物事をとらえることにより、根拠があり、説得性のある意見を述べることにつながる。しかし、自分の中の常識をくつがえすような新たな事実や主張がでてきたときに、何年も自分が正しいと思っていたことを自分で否定することは容易なことではない。それに、その主張や事実が正しいことであるかを判別することも難しいことであろう。

したがって、自分の中の常識を否定する事実や主張がでてきたときには、自分の納得のいくまでそのことについて調べ、たとえ自分の常識が間違っていたとしてもその主張や事実を受け入れるべきである。近年ではグローバル化も進み、とくに異文化理解、他者理解が必要とされる。そのため、自分の中の常識のみに縛られるのではなく、また違った事実、主張であっても**積極的に受け入れる**ことが求められる。

パルメニデスは存在論の中で、「**ないものがある**」**」**ということは矛盾しているため、「**ものとは、一にして不変のもの**」**」**と述べた。この考えを批判するデモクリトスは、「**ものとは、アトムという複数の原子の集まりである**」**」**と述べた。また、プラトンは、「**個物の背後には普遍的なアイデアが実在する**」**」**というアイデア論を述べたのである。このアイデア論に対立して、アリストテレスは、「**個物は素材と普遍的な形相で構成される**」**」**と考えたのだ。

17世紀ごろになると、デカルトは、アリストテレスの述べた Ontology(存在論)から Epistemology(認識論)へと考えを**展開転換**し、「**感覚とはそのものではなく脳が構成した**

コメント [y3]: 理解できないものを理解しようと努力することは必要ですが、なんでもかんでも受け入れればよいというわけではありません。正しいもの、受け入れるべきものを判断し、そうしたものについては受け入れればよいでしょう。

もの”と述べた。このころ18世紀末、カントは、認識枠組みは「人類普遍」と考えていた。

20世紀になると、相対主義が流行した。セザピア・ウォーフの仮説が、その考えのうちの1つだ。「言語が違えば世界が違って見える」という仮説だ。しかし、この仮説は、正しくないとされた。相違点が見えるためには、共通点が必要だからだ。チョムスキーは「普遍文法」で、「言語とは、普遍的原則によって根源的には同じ」と考えたのだ。言語とは、単語のつながりである。

ここで、私の意見を述べる。パルメニデスやデモクリトスのように「もの」についての考えと、チョムスキーのように「ことば」についての考えから、「もの」と「ことば」はどちらが先に存在するののかという疑問が生まれた。「ものという存在が先ずあって、それにあたかもレッテルを貼るような具合に、ことばが付けられたのではなく、ことばが逆にものをあらわしている」(鈴木孝夫『ことばと文化』、岩波新書、2017年、p30)。私もこの意見に賛成だ。「ことば」がまず存在するからこそ、「もの」の存在がある。そもそも人間はことばを話す。だから、ものものを区別できるのである。例えば、犬にとって、サッカーボールとバレーボールは同じボールにすぎない。しかし、人間は名前を付けて区別し、使い分ける。これは、「ことば」が「もの」という存在をつくっているということになる。

コメント [y4]: 正しくないとされた理由は、文化人類学や比較言語学の研究によって、言語が違って「見え方」は変わらないことが実証されたから。

コメント [y5]: 反対の立場についても取りあげましょう。山口裕之『人間科学の哲学』(勁草書房)はこの問題について賛否両論を取りあげて扱っていますから、買って読んでください。

今回の授業では、「正しさ」と「価値観」の違いについて学んだ。「人それぞれに正しさは異なる。人それぞれに価値観が異なるからだ。」という意見があったが、「価値観」と「正しさ」は違うという。個人の価値観は、ほとんどの場合、「社会的に価値を認められたもの」の中からどれを選ぶかという「好み」の問題なのだ。国によって習慣の違いなど価値観が違うことから生まれるものもあるのではないかと指摘もあったが、どの国でも両方ともポジティブな価値を持っており、違いはそのどちらかがより好まれるかという点にあるだけである。個人が思っている「正しいもの」というのはあくまでも個人の好みのものであって、それが正解である保証はどこにもなく、信憑性はとても薄い。自分の思い込みはあてにはならないのだ。

哲学用語の認識とは「正しい知識」のことだが、日本語では knowledge と belief を一緒にしてしまいがちだ。哲学では両者は反対の概念になる。また正しい知識はギリシア語では Episteme といい、社会全体の重い思い込みを doxa という。これは自分の持っている知識のなかで物事や価値観を決めてしまうことであり、新しい話を聞いても自分の

doxa-に取り込んでしまう人が多いので、自分の常識を否定するような事実や主張について理解することが大切。

2 自分の認識が正しいものなのかそれとも思い込みなのか判断するのは難しい。また個人が正しいと思うからといってその思いが間違っている可能性は大いにありと書いてあったが、じゃあ社会全体が正しいと判断したことがいつも正しいとは限らない。

3 何が正しくて何が正しくないのか一概には言えないと思う。

近代における哲学「Ontology」というのはパルメニデス以降の『存在とは何か』についての真理を探究するものとして発展し、Ontology という語そのものは 17 世紀に創られた言葉である。

パルメニデス本人は「一にして不変」と考え、「あったものがなくなる」や「なかったものが新しく生まれる」といった「変化」はありえないものとした。しかしその理論はあまりにも現実とかけ離れていた。現実には確かに変化があつたからだ。そこでパルメニデスの理論を何とか形にし現実に合わせてようとしたデモクリトスが、後に原子論と呼ばれる「多数の不変」について提唱した。結果この世の変化については説明することに成功したといえるが、不変が多数存在するのであればその間には何もない空間(真空)がそんざいすることになり、長く議論の対象になった。

また、「存在とは何か」についてのプラトンの理論は、現実とは別の「イデア界」を軸とした理論であった。物事の背後に普遍的なイデアが存在し、それを自分達が感じることで認識をするという考え方だ。これにもやはり「イデア界」というものがどういふものなのか、説明するには無理のある理論であり、上記の問いに完全に答えを出せるものではなかった。

17 世紀に入ると、『正しい知識』を持つにはどうしたらよいか』について考え始めるようになった。デカルトは「感覚は物そのものではなく、脳が構成したものである」と考えた。

そこから 20 世紀に入ると、各国の植民地政策の影響から異文化圏と関わるが多くなり、相対主義=Relativism が流行していくことになる。サビリア=ウォーフの仮説や文化人類学の研究などがその最たる例だ。サビリア=ウォーフの仮説では、言語が違えばものの捉え方、見え方も変わってくるというのである。この点に関しては、1970 年代以降の認知科学の発展に伴い、人類の認識の普遍性が強調されるようになった。言語は違えどものの見方・捉え方というのは変わらないという説が主流になっていったのである。

今回の講義は、主に前回の講義の振り返りとその補足、正しさと価値観の違いについてだった。前回、古代ギリシアの時代から現代まで議論され続けた、存在論、また認識論について説明を受けた。パルメニデスは、存在は「一にして不変」といい、言葉の上で「無いという状態が在る」という考えを否定した。しかし、それは物質間に存在がないといえる現実とは矛盾するものだった。デモクリトスはパルメニデスの考えを受けて、「原子」というそれ以上に絶対に分けられないことができない粒子の集合と離散で存在を説明した。プラトンは存在に「イデア」という形而上の存在が現実の存在の原型となっていると考えた。それ故に、人間や犬などと分類できると論じた。これに対し、アリストテレスは、存在は形相と資料によって決まるとして、分類はあくまで存在の形状を見て、人間が分類し直しているに過ぎないと考えた。

時代を経て、「存在を知る」ということ自体に問題提起し、思考をしている自分以外の存在に対する認識が本当に正しいかどうかは証明できないとしたデカルトを発端として、認識論が活発に議論されるようになった。カントは「物自体は認識できない」とした上で、人間自体の認識枠組み、要するに認識能力は「人類普遍」であると示した。

20世紀には相対主義が流行し、言語が異なれば概念区分が異なるというソシュール言語学や、言葉がある故に事物を区分するため、言葉が異なれば区分の仕方も大きく異なるとしたサピア・ウォーフの仮説が現れた。しかし、バーリンとケイによる色彩語研究やチョムスキーの「普遍文法」といった認知科学の観点から、人間の事物にたいする認識はそれぞれの国や文化に表現に差異はあれども、おおよそ同じである。

次に、価値観と正しさはどう異なるのかについての説明があった。個人の価値観はあくまで好みの問題であり、大体は社会的に価値が認められたものの中から選ばれる。例として、アメリカと日本における周囲の人と自分の意志のバランスについて、どちらの国でも周囲の人の判断や感情に合わせることも、自分の意志で行動を決めることにも価値があり、あくまでそのどちらが好まれるかの違いにすぎない。また、まれに社会的に価値を認められていないものを愛好する人がいるが、これに問題はない。あくまで他の人が価値を認めていないものに価値を見出しているだけである。しかし、殺人や盗みなど、社会的に禁止されているものに価値を見出し、愛好することは間違っている。あくまで価値観とは個人が「正しいと思う」ことであり、「正しさ」とは別のものである。個人の価値観は社会的・哲学的に正しいかどうか判断される対象であって、正しさの根拠にはならない。

今回の講義では、ドクサ(思い込み)という言葉が出てきた。また、講義のレジユメの続きを読んだが、「価値観を異にする人と」の部分で、「大人だから、今から価値観をすり込もうとしても難しい」という言葉があった。トランプ大統領を始め、フランスのルペン氏など、排外主義的な言葉で人々を煽る政治家がいる。移民排斥など宗教や文化、雇用の保護の観点から語るその姿は、ナチでヒトラーが民衆に向けて発していたプロパガンダを彷彿とさせる。彼にドクサをすり込まれた人々の結果がホロコーストなどの悲惨な事態だ。そのような事態を避けるため、ドクサをすり込もうとする人々の意識を変えることはできな

いのだろうか。自分は、レジュメにも書いていたように、一度本人が言った言っことは、政治家にとっては面子のため撤回しギづらいから、あくまで彼らの言葉を聞く民衆のほうが見定められないと主張する。

コメント [y6]: 私も、真偽を見定められる民衆を育てようと、大学で授業をしています。みなさんもそういう人になってください。

今回の授業は前回の授業の続きで、認識についての授業をした。そして、小テストの答え合わせ、学生の授業コメントに対する答えなどの説明を聞いた。

コメント [y7]: 具体的な内容を書くようにしましょう。

先生の、授業コメントに対する答えを聞いていて、自分の主張や考えにとらわれて、他人の考えや、自分とは異なる思考を受け入れることができていると気付いた。デカルトやアリストテレスが生み出した考え方を、「どうやったらそんな考え方になるねん」と思っていた部分があったが、それは彼らの考え方として受け入れるべきである。今回のことで、物事を客観的に見たり考えたりすることが難しいと改めて実感した。

コメント [y8]: そのようなことは言っていない。それは別の思考を切り捨てることと同じです。彼らがどうしてそのように考えたのかを理解しましょう、と言いました。

パルメニデス以来、哲学は「存在」とは何かについて考えてきた。「存在論」すなわち「“ontology”」について、パルメニデスは「一にして不変」デモクリトスは「多数の不変」プラトンは、個人の背後には普遍的なアイデアが実在し、アリストテレスは、個物は素材と形で構成されている、とそれぞれ考えた。

また、神の存在について、「自然科学的にみて神は存在しない」という内容は、事実として間違いだ。「自然を創造したもの」や「自然の第一原因」について自然科学によって知ることはできないのである。また、自然科学では説明できないことを「神」と呼んだのだ。

そして、価値観と正しさはやはりイコールの関係ではない。個人の価値観はほとんどの場合好みの問題なのだ。例えば、日本でもアメリカでも、「周りの人たちの判断や感情を尊重すること」「自分の意志は自分で決めること」の両方がポジティブな価値を持っており、違いはそのどちらがより好まれるのか、という点においてだけである。

しかし、どちらがより好まれるのかという点において違いがある、というのは、価値観に違いがある、ということではないのだろうか。そもそも「価値観」とは、物事の価値についての、個人(または世代、社会)の考え方のことである。日本においてもアメリカにおいても、2つの考え方の両方にポジティブな価値がある、という点では同じである。しかし、そのどちらにより重きを置いているのかが違う、ということは、やはり価値観の違いがあるということではないのだろうか。

コメント [y9]: 「価値観に違いがない」とは言っていない。好みの違いは人それぞれ、国それぞれにあるでしょう。「価値観が違うからといって正しさが違う」というのは間違いだ、と言ったのです。

17 世紀に、ものの在り方つまり、存在論が生まれた。アリストテレスは、個物は素材と形から成っており、個物は、普遍的な形相であると考えた。その後、デカルトは、人間は目や耳などの感覚器官を通してものを理解しているためそれらは脳が造り出したイメージだと考え、存在論から認識論に転換した。しかし、カントはものそのものが感覚に現れることはなく、もの事体を認識することはできないが、人間がものを見るとき、空間や時間の枠組みは人類普遍であると考えた。そして、20 世紀に相対主義が流行し、言葉が秩序を作ると説いたウォーフの仮説や、ソシュール言語学が生まれた。

価値観と正しさは別である。個人の価値観は、ほとんどの場合、社会的に価値を認められたものの中からどれを選ぶかという好みの問題である。自分で選んだことが正しいとは限らない。個人の価値観や思いは、社会的に正しいかどうかを判定されるべき側であり、正しさの根拠にはならない。新しいことを聞いたとき、それが自分の常識を否定するような事実や主張であっても、それらを自分の都合の良い解釈をするのではなく、理解することが異文化理解であり、他者理解である。

今回の授業の内容は、「認識」と「Ontology と Epistemology」という概念についてだった。

まず、「認識」について。哲学用語の「認識」は英語でいう Knowledge で、「正しい知識 (Truth)」ということである。日常で使われる「認識」は、「個人の解釈・信念 Belief」というニュアンスで使われることも多い。そのため、哲学を学んだことのない私たち学生は、「正しさは普遍的」と習っても、「正しさは、人それぞれの認識や価値観によって決まるのではないか」と考えてしまったのだ。「正しさは普遍的であれば、全員が同じことを正しいと認識するだろう」というここでの「認識」が、「真理 Truth を知る」という意味なら間違っていないが、「個人的な解釈」という意味なら、人間は誤解したり、間違ったことを信じてりする。プラトン哲学は、「ドクサ(Common belief or popular opinion)を脱して正しい知識へ」と言う。「社会全体が誤っている場合」に警笛を鳴らすのが哲学であるのだ。

次に「Ontology」と「Epistemology」について。アリストテレスの *Metaphysika* は *Ontologia* となり、その後デカルトによって *Ontology* から *Epistemology* へと転換された。20 世紀には相対主義 *Relativism* の流行により、サピア・ウォーフの仮説やソシュール言語学や文化人類学が作られた。1970 年以降は、認知科学の発展により、人類の認識の普遍性が強調されるようになった。これによって、チョムスキーの「普遍文法」が作られ、パーリンとケイによる色彩語研究が行われた。

正しさと価値観について、正しさは普遍的であるが、価値観は人それぞれで異なっていることはいけないことではない。個人の価値観の違いは、「どれがより好まれるか」といった「好み」の話である。しかし、社会的に全く価値を認められていないようなものを愛好

する人もいる。価値を認められていないだけならまだしも、社会的に禁止されていることを愛好する人は処罰されてしまう。このことから、「間違った価値観」は存在することが言える。

Ontology とか Epistemology とかの話はあんまり理解できなかった。自分で調べてみたい。

コメント [y10]: 具体的にどのような点が理解できなかったのか説明してくれば補足することができます。

コメント [y11]: 調べたら、調べたことを書いてください。

パルメニデス以来、哲学は「存在」とは何かについて考えた。パルメニデスは「一にして不変」と考え、「存在論(Ontology)」をとねえ、デモクリトスは「多数の不変」と考えた。プラトンは「個物の背後に普遍的なアイデアは実在する」と考え、アリストテレスは「個物は素材と形(普遍的な形相)で構成される」と考えた。次にデカルトは「正しい認識」どのようにしたら持つことができるかについて考えた。「感覚は物そのものではなく脳が(心が)構成したもの」と考え、『認識論(Epistemology)』をとねえた。そしてカントは「物自体 Ding an sich は認識できない」とし、認識枠組みは「人類普遍」と考えた。

20 世紀になると、サピア・ウォーフの仮説、ソシユール言語学や文化人類学といった相対主義(Relativism)が流行した。1970 年代以降は、認知科学の発展によって人類の認識の不変性が強調されるようになった。その例にチョムスキーの「普遍文法」やバーリンとケイによる色彩語研究がある。

また、正しさと価値観は別であり、個人の価値観は大抵「社会的に価値を認められたもの」の中から選ぶという「好み」の問題である。そのため、社会的に禁止されたものを愛好する人は処罰される。さらに、犯罪の多い社会において、「犯罪が多発している」から「犯罪が正しい」ということにはならず、犯罪者は処罰される。「事実」と「正しいこと(なすべきこと)」は別である。

私は前回の授業まで「価値観」はやはり社会や国によって異なるものであると理解していた。しかし、今回の授業で出てきたアメリカと日本の例をうけて、「価値観」はどこも同じであると理解することができた。

コメント [y12]: そうは言っていません。「価値観=好み」は人それぞれ、国それぞれに違うかもしれませんが、だからといって「正しさが異なる」ということにならない、と言いました。

認識という言葉は日常語で「個人の解釈、信念 Belief」というニュアンスで使われることが多いが、哲学では「正しい知識 Truth、Knowledge」の意味で使われる。この 2 つの認識の解釈は対立的である。前者の方は社会的な思い込み、俗説(doxa)、臆見などが含まれるため、正しさは人それぞれだという考え方と強く結びついている。よって、誤解や間違ったことを信じる人間もでてくる。逆に、後者は「正しさが普遍的だとすると、みんなが同じことを正しいと認識するはずだ」という言葉からも分かるように、正しさとは普遍であ

り、人それぞれ違うということはない。社会全体が過っている場合に警鐘を鳴らすのが哲学なのだ。また、こんなにも「人それぞれ」が蔓延しているのは、戦前の「価値観の押しつけ」「権力による強制」への反省からだ。しかし、そう考えていると、対話をするのもはや諦めているので、正しいことを主張する力を身につけることが出来ない。すると、もし、強い権力者が現れとんでもない政治をしたとしても、反論する力が無いため、我々は何も出来ない。論理的に解決は出来ないので、暴力に頼ることになる。だから、この「人それぞれ」考え方は失策と言える。

パルメニデスの存在論(Ontology)とは、「存在とは一にして普遍不変」だ。ものがあるとすれば、無いものがあるというのは論理的に有り得ないので、ものは変化しないし、複数存在しない。しかし、複数存在するものは確実にあるので、これに反論したのがデモクリトスだ。彼は複数の原子の組み合わせで世界が作られると考えた。しかし、存在が複数ということはその間がないという空間があるわけで、これは自然には真空がないということに矛盾する。その後、プラトンは個物の背後に普遍的なアイデアが実在すると考え、アリストテレスは個物は素材と形(普遍的な形相)で構成されると考えた。デカルトの時代になると目の仕組みやレンズの研究が進み Ontology から Epidemiology への転換が起こった。我々が見ているのはもの自体ではなく、感覚器官や脳の影響を受けている。つまり、ものを見る時、脳が再構成していて、ものがあるということともものを知るということはイコールではない。その次のカントは物自体を認識することはできないけれど、人間にとってはすべて同じように見える (理解する) と主張した。認識の枠組み(空間、時間)は人類普遍だからだ。20 世紀には相対主義が流行し、言葉が違ってももの見え方が違うというサピア、ウォーフの仮説やソシュールの言語学が生まれた。しかし、1970 年代以降、認知科学の発展により人類の認識の普遍性が強調されるようになった。最後に個人の価値観が正しさの根拠にならないことを学んだ。以上が今回の授業の要点だ。

自分とは異なる文化を尊重する時、「人それぞれ」だからという理由ではいけない。「人それぞれ」の考え方は相手とこれ以上関わることを拒否しているもので、お互いへの理解が全く進んでいない。もし、そこに優秀な技術や知識があつとしても学ぶことができず、損をする。必要なのは相手を無意味に肯定するのではなく、自分との共通点や相違点を探ることだ。その方がよっぽど相手を知り、理解し、尊重することが出来る。相手と対話し、ぶつかることから逃げてはいけない。

そのとおりですね。

価値観と正しさは別であり、個人の価値観は「好み」であって、「正しさ」ではない。もうすでに大人な人に今から価値観をすり込もうとしても難しいというわけではなく、強制的にすり込むよりも、対話して、相互理解を図るほうがよい。

コメント [y13]: あります。

今回の授業は、正しさと価値観についてだった。正しさと価値観は別もので、個人の価値観とは、「社会的に認められたもの」の中からどれを選ぶかという好みの問題であると学んだ。そして、個人の価値観や思いは、社会的・哲学的に正しいか判断されるべき対象であり、正しさの根拠ではないということも学んだ。

みんながやっているから自分もやっても良いというわけではない。みんながやっているから正しいとは限らない。このことは誰もが頭では理解しているが、周りに流されてしまうことが多い。なぜなら、自分が正しいと思っていることに理由や根拠をもっていないからだ。だから私は、自分が正しいと思っていることをしっかりと他人に伝えられるように正しさの理由や根拠をもつことから始める。

正しさが普遍的だすればみんな同じことを正しいと認識するはずという場合の「認識」は「真理を知る」という意味ではその通りだが「個人的な解釈」という意味では人間が誤解したり間違った事を信じたりするので違う。それは社会的に全く価値を認められていないようなものを愛好する人がいることから分かる。

またプラトン哲学のポイントの 1 つに「ドクサを脱して正しい知識へ」というものがある。ドクサとは doxa と綴られる(社会全体の)思い込み、俗説のことである。つまり哲学とは社会全体が間違っている場合に警鐘を鳴らすものでもある。私たち人間にとって人間が正しいと思っていることの中から本当に正しいことを探そうとする試みが大切なのである。

授業で「『社会的に許容されないもの』を愛好する人は処罰される」という事と「社会的規範自体が誤る場合もある」という事も学んだ。しかし「社会が誤ることがある」とわかっているのに当然のように社会は人を処罰していいのか疑問だ。なぜなら社会が間違っているとしたらその人は処罰される必要がないのに処罰されてしまうからだ。

デカルトが ontology(存在論)から epistemology(認識論)に転換した背景にはレンズや眼の研究が進み、顕微鏡や望遠鏡ができ、人間の目で見ることのできないものを見られるようになった時代背景があったという因果関係があったから転換できたということも学んだ。確かに、その時代背景がなかったら認識論が 21 世紀の社会まで伝えられていなかったかもしれない。しかしながら、デカルトはアリストテレスの考えた存在論に対してもともと疑問を持っていたのも「原因の 1 つであろう」。Ontology が 17 世紀に生まれた単語であること

コメント [y14]: ときどき誤るからといって、常に誤るとは限りません。また、処罰は機械的に行うのではなく、裁判で被告側の主張を聴いたうえで行うことになっています。もちろん、裁判が誤ることもあります。そうした場合には裁判以外の言論で自分の主張をしていく自由が保障されていることが重要です。そうした社会であれば、処罰することも正当化されるでしょう。

コメント [y15]: 根拠を示してください。

からデカルトが生き抜いた 17 世紀では存在論が主流であったに違いない。その思想に疑問をもったデカルトが顕微鏡や望遠鏡の技術を用いて今も伝わっている認識論ができたはずだ。

価値観は社会的に価値を認められたものの部分集合であることを知った。

価値観に社会的に価値を認められたもの

と数学的に表される。そのうえこの式はほとんどの国と地域で受け入れられている。だが、そのことを誤解している人が多い。例えば、2016 年に起こった相模原市障害者施設襲撃事件だ。事件の被疑者は、「2 年生の時に障がい者施設に教育実習に行った後、『障がい者なんて死ねばいい』『障がい者が]生きていく意味が分かんない』と発言していた」(千田有紀—[武蔵大学社会学部教授\(社会学\)](https://news.yahoo.co.jp/byline/sendayuki/20160728-00060463/)—、[yahoo!ニュース](https://news.yahoo.co.jp/byline/sendayuki/20160728-00060463/)「障がい者施設襲撃容疑者の「神の声」はどこから来たのか」、<https://news.yahoo.co.jp/byline/sendayuki/20160728-00060463/>)。この被疑者の発言の内容こそが被疑者の価値観を表している。実際このような価値観は持つてはいけない。その上、被疑者は、「価値観と正しさは同じだ」と思って犯行に及んだだろう。このように犯罪は価値観と正しさが混同してしまっ、起こるのだろうか。

コメント [y16]: たしかに、多くの人は、「自分が正しいと思うこと」は正しいと誤解してしまいます。

宗教戦争の主な原因は、異なる宗教にある、自分たちの信仰の中の規範にそぐわない僅かな差異である。大部分の宗教戦争は、今日のは権力や利権を守ることがそもそもの目的だった。宗教や文化の違いにより、テロを起こしてしまう人がいるが、今更彼らの中の価値観を変えることはできない。考え方が異なる人たちに対して自分たちの価値観を強制的に擦り込もうとするより、対話して相互理解を図る方が望ましい。

日本では、歴史を見ても現在を見ても、他の地域、国よりも宗教戦争が起きていません。この理由は、日本人はあまり宗教を重視せず、無宗教の方が多いためなのではないでしょうか。

コメント [y17]: むしろ、宗教戦争が起こる地域の方が特異なのではないですか。

今回の授業の内容は、カントは認識枠組みは人類普遍であると主張したということと、ヒュームは「事実」と「正しいこと(なすべきこと)」とは違うと主張したということと、新しい情報を手にしたときに自分の「ドクサ」に取り込まないように、自分の常識を否定する事実や主張を理解するようにするのがよいということでした。

このことから考えると、テレビでニュースを見たり、本を読んだりすることや、新聞を読んだりすることは重要である。

コメント [y18]: どのことを指しているのか不明確です。

理由は、テレビや新聞から世界で起こっている事件などの事実を吸収することで、知識が体系化されていき、思い込みを防ぐことができるからです。

例えば、古文を読むときに単語の意味を正しく理解していなければ、思い込みによって意味不明な読み方をしてしまいます。

しかし、むやみに本を読んでも混乱して思い込みや偏見につながるかもしれません。

したがって、本を読むときは先生に相談してみたり、有名な本を読んでもみたりするべきです。

つまり、テレビでニュースを見たり、本を読んだり、新聞を読んだりすることは重要である。

実行に移してください。

パルメニデスは「~にして不変」、デモクリトスは「多数の不変」、プラトンは「個物の背後には普遍的なアイデアが実存する」と考えて、アリストテレスは「個物は素材と形(普遍的な形相)で構成される」と考えた。

サピア・ウォーフの仮説やソシュール言語学や文化人類学により相対主義が流行した。

人類の認識の普遍性が強調されるのに伴い、チョムスキーの「普遍文法」やバーリンとケイによる色彩語研究が出現した。

価値観は個人の好みによるものなので、正しさとは別物である。

また、私は価値観と正しさの違いをもう一つ付け加えたい。それは、正しさは社会で通用するものだが、価値観はそうではないということだ。正しさは普遍的なものであるのに対し、価値観というのは個人によって異なるので、それを社会全体に押し付けるのは間違っている。

「人それぞれに正しさは異なる。なぜならそれは人それぞれに価値観が異なるからだ」というのは間違いで価値観と正しさは別のものだ。個人の価値観はほとんどの場合、好みの問題。しかし、社会的に禁止されているものを愛好する人は、処罰される。個人が正しいと思うことと正しいことは別であり、個人の価値観や思いは、正しさの根拠にはならない。

通常は個人の価値観や思いの正しさ判定するのは社会的規範だが、社会全体が過ってしまう場合がある。倫理的な理論はそういった社会規範を検討し、批判するためにある。

法律が定められることによって、多くの人がそれを正しいと思うことで社会的規範が形成されていくのならば、社会的規範はその地域の文化に左右されるものだ。なぜなら法律はその地域に根付いた風習、文化によってある程度定められるものだからだ。

コメント [y19]: 具体的にどうということなのか、例を挙げてください。

コメント [y20]: 使ってはならない言葉の一つです。

自然科学はキリスト教における神の創造説を前提として成立したため、「自然科学的に見て神は存在しない」というのは間違いである。

個人の価値観について。「人それぞれに正しさは異なる。人それぞれに価値観が異なるからだ。」という理論は間違いである。「価値観」と「正しさ」は別で、価値観は個人の好みである。さらに個人が「正しいと思う」と「正しい」ことも別なので、「間違っただけの価値観」が存在し社会的に禁止されているものを愛好する人が処罰されるのである。

社会的規範について。「事実」と「正しいこと」は違うので、どんな社会でも「道徳的な正しさが社会規範」ということは成り立つ。しかし、社会全体が過ちを犯し、間違っただけの社会的規範が形成される場合がある。倫理的理論はそのような間違っただけの社会的規範を批判するためにこそある。

間違っただけの価値観を持った人々が行うことへの処罰が間に合わず、対話による相互理解もできないので犯罪が繰り返される社会になっているのだと**思った**。

今回の講義で、「認識」という概念と「正しさ」と「価値観」の違いについて学んだ。昔の人が存在とは何かを考えていくうちに、存在論が唱えられ、その後、科学の発展に伴い、デカルトは「正しい知識」をどのようにしたら持てるのかという認識論を唱えた。哲学という「認識」とは「正しい知識」という意味である。しかし、現代では「個人的見解」という全く違う意味で使われることもしばしばある。

私は、カントの「物自体は認識できない」という考え方に**興味を持った**。カントによると、人は、物自体は認識できないが、感性や悟性を通じた現象として物を認識するらしい。確かに、人間が何かを認識する際、聴覚や視覚などの感性を通してその物を認識する。例えば、目の前にあるリンゴを、私たちは匂いや色を見て、今までの経験と照らし合わせ、「これはリンゴだ」と判断する。感性によって物を空間に位置づけし、論理的な思考力のことである悟性によって分類分けをすることで、人は物を感性や悟性を通じた現象として認識できるのだ。

今回の授業では、学生のコメントに対する応答をした。

まず「自然科学的に見て神は存在しない」という主張に対して、自然科学自体が神の創造説を前提として成立しているということ、自分の常識を否定する事実を理解するようにということを書いていた。

コメント [y21]: 興味を持った理由を書いてください。

コメント [y22]: 曖昧な伝聞表現でなく、出典を示してください。

個人の価値観は「好み」であり「正しさ」ではないこと、「正しさ」の根拠となるものが社会規範である。人の好みもそれぞれではなく、おおよそは社会的に許容されたものから選択している。また価値観の違いについては、自分の価値観を相手に刷り込むのではなく、対話して相互理解を図るほうが良い。

現代では個人の考えや「人それぞれ」の好みが尊重されるといわれているが、それらも限定されていて、害のないものであっても全てが許容されるわけではないと考える。なぜなら今回の授業にあったように、ほとんどの人が無意識的に社会的に許容されている(好ましい)ものの中から選択しているからだ。

哲学での「認識」は英語で knowledge(正しい知識・真実)であり、日常で頻繁に耳にする belief(個人の解釈・信念)と決して同義ではない。「認識」を和英辞典でひくと、know のほかに cognition・recognition・understand があげられることからこれは裏付けられる。

日本語の「認識」は knowledge と belief の両方を用いることが多いが、哲学でいえばこの二つの単語は二項対立であり、反対の概念である。ラテン・ギリシア語では正しい知識 (Episteme) と思ひ込み・俗説(doxa)というように表現される。プラトン哲学では、doxa を脱して正しい知識へと移行することが重要視された。日本で「認識」が knowledge と belief の両方の意味で用いられているのは、戦後の「人それぞれ」という政策が原因である。

コメント [y23]: それは違う。

存在論(Ontology)から認識論(Epistemology)への変換はデカルトによって行われた。20世紀には相対主義(Relativism)が流行し、サピア・ウォーフの仮説(文化によって見方が変わる)やソシュール言語学などの極端な仮説が発表された。1970年以降は認知科学の発展により人の認識の普遍性が強調され、チョムスキーの「普及文法」が発表された。人類の感覚・空間・時間は共通だということが証明されたのである。

いままでの総括として、「正しい」と「正しいと思う」ということは違うということを取り上げておきたい。よく混同されがちな二つだが、決定的な違いがある。「正しい」ことはそれ自体が正しく、truth・事実であるが、「正しいと思う」ことは完全に好み個人の思いの問題であり、価値観の違いとは、予め社会的に認められたものの中から選択することである。社会的に禁止されていることを除いては、その価値観が容認される。

今回の講義で、存在(物)の認識について興味を持った。確かに、物体が認識できるのは、物体が反射した光を網膜が捉えて脳に信号として送っているからであるし、音が聞こえるのは周波数を耳がキャッチするから、色が確認できるのは光線の波長からである。これらが実は脳で作り出したものであり、現実には存在しない可能性があると言われれば否定はできない。また、光のドップラー効果により、光速に近い速さで離れていく物体は赤っぽく見える(赤方偏移)によって、私たちの認識した色と実際の色に齟齬があるという事象もある。例えば、宇宙の膨張とともに速いスピードで移動する星は実際より赤っぽく見える。

コメント [y24]: 興味を持った理由を書いてください。

このようなややこしい命題を「われ思う、故にわれあり」で片づけたデカルトはやはり偉大である。今後も、ウィットに富んだ講義を心待ちにしています。

コメント [y25]: これは「絶対確実な知識」として出されたもの。感覚は実在と異なるという話はそこに至る過程で取り上げられる。

今回の授業では私のコメントが取り上げられていた。

価値観は国によって違うのではないかと、先生に言われるまではそう思い込んでいたが、今回の授業を聞いて先生の言っていることが正しいと分かった。確かに世界の国々ほどの価値観を尊重するかが違うだけで、尊重しようとする、正しいとすることは同じである。今まで世界史の授業などで話を聞く時は、価値観は違うから押し付けるななどたくさん聞いてきた。

しかし、これからは先生の言うことを受け入れて、**そういう姿勢**で物事を見られるようにしていきたい。こうやって自分の思い込みを否定するようなこともしっかりと受け入れて、先生の言う本当の異文化理解をしていきたい。

コメント [y26]: 具体的にどのような姿勢なのか、もう少し具体的に書いてください。

哲学において「認識」とは英語で「Knowledge」と表される。日常において「認識」は、個人の解釈・信念(英語で表すと Belief)というニュアンスで使われることも多いが、哲学の中で「認識」は、正しい知識(英語で表すと Truth)という意味であり、両者は反対概念として扱われる。というのも、個人の解釈・信念の中には社会全体の思い込みとされている俗説(doxa)なるものが潜んでいる可能性があり、それらが本当に「正しい知識」と言えないからである。よって哲学において「Knowledge」と「Belief」は全く異なるものとして扱われる。プラトンは「ドクサ(俗説)を脱して正しい知識(Knowledge)へ」という言葉を哲学を考える上でのポイントとして記した。

上記に示した言葉に加えてプラトンは、「社会全体が過っている場合」に警鐘を鳴らすのが哲学である、**とも唱えた**。これらを示す背景として、俗説が社会全体に蔓延している事実があげられる。例えば、日本では周りに合わせるのがよいことで、アメリカでは自分のことは自分で決めるのがよいことである、という価値観についての俗説がある。つまり、日本では「周りの人の判断や意見を尊重すること」が良いとされて、アメリカでは「自分の意志を貫くこと」が良いとされる、ということである。しかし、どちらも「ポジティブな価値」を持っているため、どちらが「正しい」ということはない。「社会的な価値観の違い」と言われているものは、ほとんどの場合、「社会的に価値が認められたもの」の中からどれを選ぶかという「好み」の問題である。つまり、「正しさ」と「価値観」は別のものである。両者を同じものとする俗説が広がってしまっていた、ということである。

コメント [y27]: プラトン自身がそう言っているのではなく、哲学の役目についての私の解釈。

「正しさ」と別のものは他にもある。それは「事実」である。「正しいこと」は「なすべ

きこと」とも言い換えることができ、社会的規範がそれに当たる。つまり、「犯罪が多発している」からといって、「犯罪が正しい」ことには到底成りえるはずがない。ヒュームは「自然主義的誤謬」の中で、「事実」と「正しいこと(なすべきこと)」は異なるものであると示した。

個人が「正しいと思う」ことと、「正しい」ことは別である、と学んだ。なぜ、論文やレポートを書く時に「思う」と書いてはいけないか、この時に補足された。「思う」としたら、それは「個人の思い」になるため、「正しい」かどうか分からなくなる。個人の価値観や思いは、正しいかどうか判定されるべき「対象」であるので、正しさの「根拠」には成りえない。なぜ「正しい」と「思う」のか、明確な根拠を示さなければ「正しさ」は証明されない。もしかしたら、自分が「正しい」と「思う」ことが間違った知識、いわゆる「俗説」であるかもしれない。「思う」、「考える」などの個人的感情を表す言葉は、それだけでは意味を成せない「思い込み」である。そう考えた時、我々が普段何気なく使っている「思う」や「そう考える」などの言葉には絶対的な「正しさ」が存在しない。普段から「理由」や「主張を裏付ける根拠」を持っておけば、「俗説」に流されることも少なくなる。

17世紀に作られた言葉の「存在論 Ontology」についてパルメニデスは「一にして不変」、デモクリトスは「多数の不変」、プラトンは、個物の背後に普遍的なアイデアが実在すると考え、アリストテレスは個物は素材と形(普遍的な形相)で構成されると考えた。19世紀に作られた言葉「認識論 Epistemology」についてデカルトは「正しい知識」をどのようにしたら持つことができるかと考えた。カントは「物自体 Ding an sich は認識できない」と考えて認識の枠組みは人類普遍と考えた。「自然科学的にみて神は存在しない」というコメントは内容は事実として間違い。個人の価値観や思いは正しさの根拠にはならない。「事実」と「正しいこと(なすべきこと)」は違う。通常、個人の価値観や思いの「正しさ」を判定するのは社会的規範だが社会全体が過つ場合もある。哲学・倫理学は規範そのものを論理と事実によって批判的に検討する。宗教戦争は教派の権力を守ることがそもそもの目的だった。考え方が違う人たちに対しては対話して相互理解を図るほうがよい。

存在論について考えた人でパルメニデス、デモクリトス、プラトン、アリストテレスなどが挙げたが「ヘーゲルはカントを批判して壮大な存在論的体系を築き上げた」(IDEA-MOO 知の体験,「存在論と認識論」,井出薫)とあったが他の学者も出しているんですか?

第4回哲学基礎では、前回の授業の復習と「正しさ」と「価値観」の違いについて学習

コメント [y28]: (井出薫「存在論と認識論」、ウェブサイト「IDEA MOO 知の体験」所収、

<http://idea-moo.net/chi-taikun/ono09123101.html>、○月○日閲覧)

のように書きましょう。

ところで、「井出薫」さんとは何者か、検索して確認しましたか?

コメント [y29]: はい。

した。

まずは前回の復習から。哲学の中で用いられる「認識」という言葉は「正しい知識」という意味であって、最近政治家がよく使っているような、「個人的な見解」という意味ではない。

次にパルメニデス、デモクリテス、プラトンについての復習。パルメニデスの時代以来は、哲学は「存在」とは何かについて考えてきた。それを「存在論」、Ontology という。パルメニデスは、「一にして不変」と考えた。これは、言葉という不変なものがあることで、対象物は変わることのないものである、といった考え方である。それに対し、デモクリテスは、「多数の不変」と考えた。プラトンは、個物の背後に普遍的なアイデアが実在すると考えた。このプラトンの考え方はパルメニデスの「一にして不変」の考え方が基になっている。また、アリストテレスは、個物は素材と形で構成される、と考えた。

その2世紀後、哲学の議論が活発化した。その背景には、17世紀頃、望遠鏡などが作られたことによって、肉眼では見えないものを見ることができるようになった、という背景がある。レンズや光についての研究が進んだことによって、眼の仕組みについてわかってきた。その後、その結果、「感覚は物そのものではなく、脳が構成したものである」と考えられるようになった。このように物理学が発展していったことにより、「存在」について考える「存在論」から、「個物認識」をどう認識するか、という「認識論」、Epistemology に議論の内容が移行していった。この時、デカルトは、物自体をどうすれば正しく認識できるのかについて考えた。そして彼は、個物とは視覚的に確認できるものではなく、脳が構成したことによって確認できるのだ、と考えた。カントは、「物自体 Ding an sich は認識できない」、つまり、認識の枠組みは人類普遍であると考えた。

20世紀には相対主義という考え方が流行した。この考え方には、サピア・ウォーフの仮説とソシュール言語学の代表的な二つの考え方がある。サピア・ウォーフは文化が違えば物の見え方や考え方が違って来る、と考えた。しかし、この考え方は20世紀後半(1970年以降)の研究によって、「人間は人種や文化が違っても大体の物の見え方や考え方は同じだ」と考えられるようになった。この考え方と似ているが、チョムスキーは、人間の言語はすべて一緒であり、「普遍文法」という全ての言語は「飾りの言葉+主要な部分」でできている、という考え方を編み出した。

ここまで、段落が区切られていなかったで読みにくかったです。適当に切ってみました。参考にして、これからは適当なところで段落を切るようにしてください。

次に「正しさ」と「価値観」について。「正しさ」という言葉と「価値観」という言葉はよく混同して使われるが、同じ意味の言葉ではない。「価値観」とは、大方、社会的に価値を認められたものの中からどれを選ぶかという「好み」の問題である。よって「正しさ」と「価値観」という言葉は全く別のものである。次に「正しさ」について述べる際に「正しいと思うことは人それぞれである」という言葉をよく聞く。しかし、ほとんどの人は「社会的に許容された好ましいもの」から選択するので、個人間で大きな差はない。また、ま

コメント [y30]: パルメニデスは紀元前500年ごろですから、「その2世紀後」が17世紀なのは計算が合いません。

れに「ほとんどの人が価値を認めないもの」を愛好する人もいるが、それも社会的に許容されたものであれば受け入れられる。逆に言えば、「社会的に許容されないもの」を愛好する人は処罰される。

このように価値観や思いの「正しさ」の基準となるものは社会的規範である。だが、社会的規範自体が誤ってしまう場合もある。そのようなことが無いように、哲学や倫理学では、社会的規範そのものを論理や事実を用いて批判的に検討している。また現代社会では実際に、価値観の違いによってテロが起こることもある。このようなことが起こっても、相手に対して強制的に自分たちの価値観をすり込んだりするのではなく、まずは相手の話を聞いて、対話をして相互理解を図っていくことが大切である。

私は今回の講義のなかで、「正しさ」というものは「社会的に好ましいもの」から選択するので個人間で大きな差はないという部分に反対だ。なぜなら、**日本では未成年はお酒を飲んではいけないという決まり**があり、飲んでしまうと法に触れることになってしまうため、よしとはされていない。しかしエチオピアでは、飲酒するのに年齢制限がない(外務省『エチオピア連邦民主共和国』、www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/ethiop_1.html、2018年5月7日アクセス)ため、未成年でもお酒を飲む人はいる。このように同じ世界の中でも、文化が違えば「正しさ」というものは変わっていくからだ。よって「正しさ」というものに大きな差は無いという考えに反対だ。

授業まとめ

今回の授業では、存在と認識、正しさについて学んだ。

存在と認識について

まず、哲学では「存在」について考えられてきた(存在論)。パルメニデスは「一にして不変」であると考えた。デモクリトスは「多数の不変」と考えた。また、プラトンは個物の背後には普遍のアイデアが存在すると考えた。そして、アリストテレスは個物は素材と形相で構成されると考えた。

次に、デカルトによって存在論(Ontology)から認識論(Epistemology)へと転換した。デカルトは「正しい」知識について考え、感覚とは脳が構成したものであるとした。また、カントは「物自体 Ding an sich を認識することはできず、認識の枠組みは人類普遍である」と考えた。

そして、20世紀に入ると相対主義 Relativism が流行し始めた。サピア・ウォーフの仮説、ソシュールの言語学がその例である。さらに、チョムスキーの「普遍文法」や、バーリンとケイの色彩語研究など、認知科学の発達によって人類の認識の普遍性が主張された。

正しさについて

まず、正しさと価値観は別のものだ。

コメント [y31]: 酒については二回目の講義の時に取りあげました。多くの国で未成年の飲酒が禁止されているのは、酒は未成年には有害だという考えが共通だからです。エチオピアでは、子どもに酒を飲ますのはよいことだ、飲ませるべきだ、と考えられているのですか？
法的に禁止されていないからといって、「よい・正しい」と考えられているわけではないことはたくさんあります。日本には「セクハラ罪」がないからといって、セクハラOKというわけではないでしょう。

国によって価値観が異なるのは、どの価値がその国において好まれるかが国ごとに違うからであり、価値観が異なるからではない。

また、個人が「正しいと思う」ことと、「正しい」ことは別である。「間違っただけ」も存在し、個人の価値観や思いは、社会的・哲学的に正しいかどうかを判定されるべき対象であって、正しさの根拠にはならない。

社会的規範と「正しさ」については、ヒュームの法則によると、「事実」と「正しいこと」が違うということである。

意見・質問

ヒュームの法則によると、「ある状態である」から「こうなる(する)べき」とは導くことができない。原因と結果に関係性はあるとしたとしても、その結果からよし悪しを決めることはできない。それは、**よし悪しを決める際に、個人の思いや価値観が入ってしまうからである。**

コメント [y32]: ちがいます。「事実」と「なすべきこと」は別のことだからです。

今回の講義では、前回の認識について少しと、正しさと価値観について学んだ。

パルメニデス以来、哲学は「存在」とは何かについて考えられてきた。パルメニデスは「一にして普遍」、デモクリトスは「多数の普遍」などと考えていた。また、デカルトは「正しい知識」をどのようにしたら持つことができるか考えた。このような認識論 (Epistemology) が進むことで様々な研究が進んだ。またカントは「物自体は認識出来ない」とした。

次に、正しさと価値観についてだが、まず、この 2 つは別のものである。価値観は、個人の好みや考えが含まれているが、正しさは事実であったり、社会の規範である。しかし、社会の規範自体が間違っていれば、正しさが全体的に誤っている場合もある。では、社会の規範の決定の仕方だが、多数決では多数派の意見が専制される場合がある。違う価値観を持つ人とは対話を通し、相互理解の方が好ましい。

今回の講義で疑問に思った点だが、なぜ**批判されるべきではない価値観や考えでも処罰されたり批判される事がある**のだろうか。私が考えられるのは大多数がその意見を好ましくないので、排除することで意見を統一しようとする事と、その価値観が宗教の教えに反するものであったりするという事だ。また、この考えから、なぜ意見の違いがある時に多数決で決まった意見が正しいと考えることが**一般的になったのか**、どうして討論や対話が行われることが少ないのか疑問に思った。この疑問についての私の回答は、まず対話だと時間がかかってしまうこと、人は大多数の人間の意見が正しいと信じやすいからだと考えられる。これらの疑問について回答お願いしたい。

コメント [y33]: 具体的にどのような価値観や考えですか？

コメント [y34]: 「民主主義は多数決」という俗説が流布していますが、哲学的にはまちがいです。詳しくは、山口裕之『人をつなぐ対話の技術』(日本実業出版社) を読んでください。

今回の講義はすごく共感できた。確かに「個人の価値観」=「正しさ」ではない。例えば、日本はアメリカに比べて周りに合わせるが良いこととされるという指摘があるが、日本でもアメリカでも「周りの人々の意見に耳を傾け、受け入れること」と「自分の意志を貫くこと」の両方のポジティブな価値を持っており、違いはそのどちらがより好まれるかということだけである。

また、社会的に全く価値を認められていないものを愛好する人もいる。例を挙げるなら、鳥島のアホドリを人生をかけて愛した人がいる。また、「事実」と「なすべきこと」は異なる。犯罪が多発しているからと言って犯罪を犯しても良いかといったらイエスであるはずがない。そこに自分の価値観と正しさの違いがあり、「事実」と「正しいこと」の根本的な差異がある。では、「社会的な規範の正しさ」とは多数決で決まるかといったら多数決は多数派の権威がどうしても強くなるので、多数派の専制になりかねないというリスクを孕む。ならばどうすれば平和的であり、合理的であるかということ、「人間が正しいと思っていること」の中から、「本当に正しいこと」を探そうとする営みの中にこそ答えはある。

これまでの人類の長い歴史の中では、自分たちの信仰の中の規範にそぐわないものを異端などとし、排除しようという自民族中心主義(ethnocentrism)が原因で、世界中で様々な紛争や争いが勃発してきた。「テロなどを起こす人がいるので、価値観を内面化するやり方を国際的に統一すべきだ」という指摘があるが、控え目に言っても不可能である。自分たちの価値観を押し付けるのではなく、考え方が異なる人達に対して、どのように対話をし、意思疎通を図り、相互理解をする方法を探っていく必要がある。

パルメニデスは「存在」とは何か、「一にして普遍」、デモクリトスは「多数の普遍」について考えた。また、プラトンは個物の背景には普遍的なアイデアがあると考え、一方アリストテレスは個物は素材と形(普遍的な形相)で形成されると考えた。デカルトは正しい知識の持ち方を考え、17世紀に顕微鏡などにより今まで肉眼では見えなかったものが見えるようになると、目の仕組みについて研究がなされるようになり、感覚は物そのものではなく脳が構成したものであるとされた。

17世紀には「Ontology(存在論)」という言葉が作られたが、19世紀になると「Epistemology(認識論)」という言葉が作られた。20世紀には相対主義(Relativism)が流行した。

自然科学はキリスト教における神の創造説を前提として成立したものであり、「自然を想像した者」「自然の第一要因」については自然科学によっては否定も肯定もできないので知ることができない。新しい話を聞いても、自分の「ドクサ」に取り込んでしまう人が多いが自分の常識を否定するような事実や主張について理解して異文化理解や他者理解をしな

コメント [y35]: 世界中で紛争や争いが勃発するのは、「人類の長い歴史」というよりは、20世紀の現象でしょう。

ければならない。

「価値観」と「正しさ」は別だ。個人の価値観は「社会的に価値を認められたもの」の中からどれを選ぶという「好み」の問題であるからだ。また、価値観にも間違っただけの価値観があり、間違っただけの価値観を愛好する人は処罰されることもある。個人的な価値観や思いは、社会的・哲学的に正しいかどうかを判定されるべき対象であって、正しさの根拠にはならないので、個人が「正しいと思うこと」と「正しい」ことは別である。よって犯罪が多発しているからといって犯罪が正しいということにはならない。「事実」と「正しいこと(なすべきこと)」とは違うのである。

今回の授業は、最初に前回の授業の復習をした後で正しさと価値観や社会規範と「正しさ」などについて学んだ。「価値観」と「正しさ」は別物であるということが、今回の授業での要点である。実際に授業の中で、個人の価値観は、ほとんどの場合、「社会的に価値を認められたもの」の中からどれを選ぶかという「好み」の問題と出てきたが、その個人の価値観が必ず正しいものであるとは限らず、社会的に禁止されているものを愛好する人がいるなど「間違っただけの価値観」を持っている人がいることがある。当然、そのような間違っただけの価値観は正しくない。個人の価値観というものは、社会的・哲学的に正しいかどうかを判定される対象であり、正しさの根拠になることはない。

以上のことから、今回の授業の要点は「価値観」と「正しさ」は別物だということである。

引用 山口裕之「総合科学の基礎 C 哲学思想の基礎 そもそも「哲学」とは3」

<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/shin-kokusai/philosophy/2018/20180427paper.pdf>

個人の価値観は「正しさ」ではない。例えば児童ポルノは閲覧するだけ(だけと言ってしまえばそれは間違っていないと思っていると誤解されるかもしれないが、ちがう)で違法となる。一方、社会的規範は通常「正しさ」である。しかし、古代ギリシャや日本の室町時代に少年愛は「正しい」ものだとされていた。このように、社会全体で時代ごとに誤った方向に進まないか監視するために、哲学・倫理学を学んでいかなくてはならない。

コメント [y36]: この場合の例では、日本が誤っているのですか、それともギリシャや室町時代が誤っているのですか？

今回の授業の要点は Knowledge と Belief の違い、正しさと価値観は別ということ、社会的規範と正しさにおいて「事実」と「正しいこと(やるべきこと)」は違うということです。

しかし、ここまで授業を受けてきて哲学というものはキリがなく、1つの結論を導き出すのは無理なのではないかと思う。なぜなら、ある程度世界中で共通の社会規範があるにしてもその国や地域独特の文化や考え方がある。そこで暮らす人々にとってはポジティブなものであっても、他の国や人からすると受け入れがたいものもある。人それぞれがないといっても実際には存在するし、個人の価値観は「社会的に認められたもの」の中からも選ぶかという「好み」の問題といってもそれもただの言い回しの違いなのではないだろうか。

コメント [y37]: 哲学という学問全体が正解に至らないとしても（哲学だけでなく、物理学だって「最終解答」には至らないでしょう）、あなたが一つの結論を出す努力をやめてよいことにはなりません。

コメント [y38]: どういう意味ですか？「正しさ」と「好み」は、同じものの言い換えではなく、別のものです。

存在論から認識論へ

アリストテレスの *Metaphysika* は *Ontologia* になり、それがデカルトの転換により *Epistemology* へとなった。ただし *Episteme* の *Logos* は 19 世紀になってから作られた言葉である。それから 20 世紀となり相対主義 *Relativism* が流行しサピア・ウォーフの仮説やソシュール言語学などが誕生した。

正しさと価値観

「人それぞれに正しさは異なる。人それぞれに価値観が異なるからだ。」と考える人が多いがあるが「価値観」と「正しさ」は別物であるからそうは言えない。そもそも個人の価値観はほとんどの場合、「社会的に価値を認められたもの」の中からどれを選ぶかという「好み」問題である。これは「社会的な価値観の違い」といわれるようなものとおおむね同様である。しかし、まれに、社会的に全く価値を認められていないようなものをを愛好する人もいる。ただし、社会的に禁止されているものを愛好する人は処罰される。そういった「間違った価値観」もある。根本的に言えば、個人が「正しいと思う」ことと、「正しい」ことは別物である。それは、個人が「正しいと思う」からと言って、その思いが間違っている可能性は大いにあり、個人の価値観や思いは、正しさの根拠にはならない。

社会的規範と「正しさ」

通常は、個人の価値観や思いの「正しさ」を判定するのは社会的規範である。それは、社会的に禁止されているものを愛好すると処罰されることや犯罪が多発する社会にも犯罪を禁止する法があることからいえる。しかし、社会全体が過つ場合もある。たとえば、「個人は国のために命を捨てよ」という法律が定められることはありうる(徴兵制)。そして多くの人がそれを「正しいこと」と信じることもありうる。そして、プラトンのドクサ批判によれば、倫理的な理論は、社会的規範を検討し、批判するためにこそあるのである。

宗教戦争の原因

大部分の「宗教戦争」は、教派の権力や利権を守ることがそもそもの目的であった。その歴史的事実は、闘争に際して、教義が連帯のきずなどとして利用され、宣伝されたために、それを信じ込んだひとたちが、教義の違いを闘争の真の理由だと信じ込んだことである。

価値観を異にする人と

価値観や考え方が違う人たちに対して、自分たちの価値観を強制的にすり込もうとするよりは、対話して相互理解を図る方がよいだろう。

今回の講義は、認識が正しい知識であることが主に大切なことであるとわかりました。今回特に気になったのは、「人それぞれ」という言葉です。

価値観の押し付けを行えば、その価値観を嫌がる人が必ず**発現出現**します。政府は戦前から戦時中はそのような者たちを厳正に罰してみんなが同じ目標に向かうことができるように環境を整えました。

その反省を踏まえて人の個性を尊重し、「人それぞれ」が広まっている現代社会では、必ずしもいいことばかりではありません。スライドにも表示されていた「しかし、『人それぞれ』などと言っていると、強いものが勝つ」とありますが、「他にも人の価値観はその人のものである」と自分自身と疎外することで自分の価値観に浸りきってしまい、他人との意見や主張の「対立」に間違った対応をしてしまうことが起きます。

このように、どちらの教育方法も問題点があげられました。現代は戦前よりかは生命を尊重する思想が学校教育でもされているので現代は戦前よりかは少し改善されている。これからは新しい教育形式が生まれるまでは現代を「**遷移期**」という位置づけで現状維持していくのがよいと考える。

コメント [y39]: 「遷移期」なら、より良い時代へ向けて改善すべきであって、「現状維持」ではいけないのではないですか。

個人の価値観については好みであり、それが一概に正しいとは言えない。また、人それぞれというわけでもなく社会的に許容されたものを選択し、許容されていないものを愛好すると社会的に制裁を受ける。

そういった要素より、宗教戦争や価値観の違いからの問題が起こっているという内容の講義だった。

そこで私は疑問に思ったのですか、「社会」とはなんなのでしょう?先生は多数決で決まっているものではないとおっしゃっていましたが、そうであれば一体なにが私たちの価値観を決定しているのでしょうか。

昔から耳にすることが多かった「**民主主義**」といった考えが社会だとするとどうしても社会の正体は多数決だと考えざるを得ないので、上記の質問をさせていただきます。

コメント [y40]: 民主主義は多数決だという俗説が流布していますが、それは哲学的には誤りです。詳しくは山口裕之『人をつなぐ対話の技術』(日本実業出版社)を読んでもください。

今日の授業で、新しい話を聞いても、自分の「ドクサ」に取り込まずに理解するようにすること。国が違っててもポジティブな価値観を持っており、どちらがより好まれるかの違いである。個人が「正しいと思う」と、「正しい」ことは別であり、個人の価値観や思いは正しさの根拠にはならない。「事実」と「正しいこと(なすべきこと)」とは違う。ということ学んだ。

確かに、自分の知らない意見や自分の意見を否定されるような事実や主張に出会ったとき、素直に受け止めようと思っても、自分なりの解釈で理解していたり、受け入れなかったりすることがある。「事実から目をそむければ背けるほど、欲しいものが何も得られない人生になってしまう」(社ともあき、[「THREEK TRiB」](http://threek-trib.com/)、<http://threek-trib.com/>事実を事実として受け入れる事が成功の秘訣、5月5日)とあるように、「事実を事実のまま受け入れる」ことは非常に重要なことである。また、授業であったように、「異文化理解」「他者理解」にもつながり、これから社会にでて多くの人と関わっていく中で必要になるものである。

パルメニデスは一にして不変だと考えた。しかし、その考えは非現実的すぎるため、デモクリトスは多数の不変だと考えた。万物の根源が原子だと考えたのは、原子は組み合わせによって複数になり新しい形ができるということからである。その次に、プラトンはアイデアが存在すると考え、アリストテレスは個物は素材と形で構成されると考えた。アイデアや、エイドスは存在論によるものであるが、デカルトによって、存在論から認識論へと転換した。デカルトが生きていた時代には、望遠鏡での研究が進んだ。今までは感覚は物そのものと考えられていたが、脳が構成しているのだと考えられるようになった。

正しさは人それぞれではない。また、「正しいと思う」と、「正しい」のは別である。「正しいと思う」のは、個人の価値観であって、実際に正しいとは限らないからである。

世の中には、覚醒剤のように所持していたり使用してはならなかったりするものがたくさんある。最初からそんなものが存在しなければ、誰も犯罪を犯したりしないのにと疑問に思ったことがある。しかし、この授業で、ヒュームの「事実」と「正しい」が違うという考えから、あってはならないものが世の中から消えないのは、「正しくない」と分かっているながらも作ったり使用したりしている人がいるという事実があるからだ分かった。このような、社会的に価値を認められていないものを好む人がいる限り、あってはならないものは消えない。

これまでの授業を通して、「正しさ」について学んだ。

コメント [y41]: この人が何者か、検索して調べましたか？

コメント [y42]: 「事実を事実のまま受け入れる」とは具体的にはどういうことでしょうか？前回の授業では、事実は必ず解釈しなければならず、解釈の困難な事実について、自分の固定観念で勝手に解釈せず、事実即した新たな解釈を作り出す必要がある、と言ったつもりです。

コメント [y43]: 存在した後で、「有害だ」と認定されたものが禁止されることとなります。ちなみに、覚せい剤は戦前の日本では夜勤の工場労働者や戦闘機のパイロットに支給されていました。

授業コメントで書かれていた「正しさは人それぞれ」にある「正しさ」は、「個人にとっての正しさ」だ。言い換えるなら、「個人の意見」である。

例えば、一つの規則の撤廃に対してさまざまな見方があるとする。「その規則が正しい」と思う人の意見は「規則を存続すべきだ」であるし、「その規則が間違っている」と思う人の意見は「規則を撤廃すべきだ」である。

どちらも「自分の意見が正しい(少なくとも相手の意見よりは正しい)」と思うからこそ、そう主張する。つまり、「意見(=その人にとっての正しさ)は人それぞれ」なのである。

「意見は人それぞれ」なのは当然であるが、その「意見」を「正しさ」と言ってしまうと齟齬が生じる。なぜなら、正しさと言ってもさまざまにあるからだ。「正しさは人それぞれ」のように使うと、あたかも「普遍的な正しさは存在しない」と言っているように聞こえる。

どうしても「正しさ」と言うのならば、「個人にとっての正しさ個人が正しいと思うこと」や「社会における正しさ」のように、指定できる文言を付け加えるべきである。

そのとおりですね。言葉を正確に使うことは大切です。

「価値観」と「正しさ」は別であり、個人の価値観はほとんどの場合、「社会的に価値を認められたもの」の中からどれを選ぶかという「好み」の問題である。「社会的に許容されないもの」を愛好する人は処罰されるが、それは「間違った価値観」があるということである。そもそも、個人が「正しいと思う」ことと、「正しい」ことは異なり、社会的規範は、通常「正しさ」の根拠として通用する。個人の価値観や思いは、社会的・哲学的に正しいかどうかを判定されるべき対象であって、正しさの根拠にはならない。しかし、社会的規範自体が誤る場合もある。哲学・倫理学は、規範そのものを論理と事実によって批判的に検討する。

また、大部分の「宗教戦争」は、教派の権力や利権を守ることがそもそもの目的であり、闘争に際して、教義が連帯のきずなどとして利用され、宣伝されたために、それを信じ込んだ人たちが、教義の違いを闘争の真の理由だと信じ込むようになった、というのが歴史的な実態である。

今回の授業では前回の復習、補足を主にした。パルメニデス以来哲学では「存在」について考えるようになった。無いものの存在をめぐってはパルメニデスの「一にして不変」やデモクリトスの「多数の不変」という考え。物が持つ普遍性についてはプラトンのイデアやアリストテレスの素材と形相がある。しかし17世紀頃から、望遠鏡の発明によりレン

ズや光の研究、眼の仕組みの研究が進んだことで感覚は物そのものではなく脳が構成したものだという考えが出てきた。そしてデカルトは「私が存在する」という絶対確実な認識によってすべての認識を基礎付けようとした。カントは「実物体は認識できない」とした上で「認識の枠組みは人類普遍」であるとした。

また 20 世紀頃、植民地政策などを背景に相対主義という考えが扱われるようになった。これは人種や言語が変われば世界の見方も変わるというものだったが 1970 年代以降認知科学の発展により人類の認識の普遍性が強調されるようになった。言語は人間の先得的なコミュニケーション手段であり大きな違いはないとしたチョムスキーの「普遍文法」がこれにあたる。

学生のコメントの「自然科学的に神の存在は存在しない」ということについては、間違いであり自然科学自体がキリスト教における神の創造説を前提に成立したものであり神の有無を自然科学では知ることはできない。自分の常識を否定するようなことを理解しようとすることで「ドクサ」から脱した「異文化・他者理解」ができる。また正しさと価値観については両者は別物で人間の持つ価値観は概ね似通っている。差異は好みの違いによって生まれる。個人の価値観は正しさの根拠になるものではなく社会的に禁止されるような「間違った価値観」も存在する。

私たち自身の価値観だけでは正しさを導き出すことができないので、多くの情報を集め社会的規範や多くの他者の価値観を理解することで根拠を持った正しさを主張することができる。

今回の講義では、言語というのは人間だけの能力であり、過去に言語が違えば考え方も違うという考え方があることを知った。また、「自然科学において神は存在しない」ということが間違いであるということも学んだ。

私は、言語は人間だけの特別な能力と考える。他の動物も何らかの言葉を話して、コミュニケーションをとっている。例えば、イルカは、クリックスという音波を出してコミュニケーションをとっている。他の動物も鳴き声や行動でコミュニケーションしている。しかし、人間は行動で自分の意思を伝えることができるうえに、言葉も話す。他の動物とは違い、複数のコミュニケーション方法があるので、人間にとって言語は特別である。

これから言語が人間にとってどういうものであるか調べてみたい。

コメント [y44]: 山口裕之『人間科学の哲学』
(勁草書房) を読むことを勧めます。

今回の授業は、主に「価値観」のことについて学習した。「正しさ」と「価値観」は別のことであり、個人の価値観は「社会的に価値を認められたもの」の中で選択する好みの問

題であること。そして、社会的に禁止されているものを愛する人もいるが、そういった人たちは処罰されることになり、そのことが間違った価値観があるということになる。個人の価値観や思いは、あくまで社会的・哲学的に正しいかどうか判定されるべき対象であり、正しさの根拠にはつながらないということ。また、「正しいこと」と「事実」とは違うということであった。さらに前回の授業の続きで、存在論から認識論へと移り行く過程を学習した。パルメニデスは「一にして不変」、デモクリトスは「多数の不変」と考え、プラトンは個物の背後に普遍的なアイデアが実在すると考え、アリストテレスは個物は素材と形で構成されると考えたということであった。

価値観はどのようなものやことに価値があるのかを認めるための個人個人の判断であり、価値観は個人が「正しいと思うこと」と一緒である。正しさとは、自然科学におけば「True: 真理」であり、言葉と物が一致していることである。倫理学におけば「Right: 正当、公正」であり、これは個人的な道徳感情とは異なるものである。加えて、社会的な正しさは、あるものやことを判断するための基準となるものである。個人が正しいと思うためには、基準となるものが必要である。これをもとにしたうえで個人個人が共有する価値観が生まれてくる。このことをより詳しくするために、「正しさ」と類似する「正義」を調べた。正義とは、

「人間の社会的関係において実現されるべき究極的な価値。善と同義に用いられることもあるが、善が主として人間の個人的態度にかかわる道徳的な価値をさすのに対して、正義は人間の対他的関係の規律にかかわる法的な価値をさす」（『ブリタニカ国際大百科事典』小項目電子辞書版、ブリタニカ・ジャパン）。社会的関係の中での価値であり、これが人それぞれになると社会が成り立たなくなる。社会的な正しさは物事を判断するときの基準となるものである。

今回の授業は、前回の続きで生徒の授業コメントの一部例にとりながらの授業だった。その中でも存在論と認識論について掘り下げた内容で、歴史上の哲学者がモノの認識をどのように考えていたのか、歴史上長く支持されていた存在論がどのように認識論へと展開されていったのかを学ぶ授業であった。

西洋哲学ではもともと、この世界を創造した神が存在しており、モノを認識するにあたってその神が作り出したのだからモノと人間の認識の間には神による保証がされていた。アリストテレスが提唱したような、私たちが認識している物体を形と、その物体の基礎的な部分とに分け、すべては現実に存在するという存在論が長く支持されていた。師であるプラトンが提唱するアイデア論に反対する考えを提唱したアリストテレスの存在論はデカルトにより認識論へと転換されていった。

長く西洋哲学の歴史を作っていた存在論ではあるが、カントが唱える人間が認識してい

コメント [y45]: 英語で言えば justice ですが、これはラテン語の jus (法) に由来する言葉です。Right に近い意味ですが、哲学では「正義」は「配分の公正さ」という意味で使うことが多いです。

るのは物質、物体ではなく現象であり、私たちは物自体を認識することはできない(認識の枠組みはすべての人類に共通する)という考えや、サピア・ウォーフによる相対主義が現れたことで、私たちが考える思考と、モノの間に発生する認識の一致を保証する神の存在が絶対的でなくなった。モノについて私たちは正しく理解することはできない。

自分自身の考えは相手と必ずしも一致しているとは限らない。しかし、認識の枠組みが人類普遍であるとすれば、自分の考えも相手の考えもある一定の範疇で思考されているものである。自らの中にある常識を疑い、相手の考えを受け入れることは多面的な理解を深めることにはとても重要なことだ。20世紀にいわれた相対主義という言葉による認識の違いは、グローバル化が叫ばれる21世紀を生きる私たちにとっても、非常に重要な学びである。

「正しい知識」を得るためにはあらゆるものを疑う必要があり、その疑いからレンズや眼についての研究が進み、現代につながる多くのものが明らかになった。正しいものを得るためには与えられたものを受け入れるだけでなく、自ら疑って追究する点で大学の学びと共通している。

正しさと価値観について

価値観は社会的に価値が認められたものから選択するという好みの問題であるため、正しさと異なる。国によって価値観は異なってもどちらがより好まれるかという程度であり、180度異なるわけではない。それに対して正しさは個人の意見や好みと全く関係がないところに存在する、社会的な規範に即される。いくら個人にとっては正しいことだと思っても、社会的に禁止されているものだとしたら、それは正しさとはいえない。自分の中の正しさの基準と社会の正しさの基準はいつでも一致すると思いついてはならない。

また社会がどのような状況になろうと、正しさは常に変わるものではない。犯罪が多発しているからといってそのことが正しいというわけではなく、規範はいつでも一定して存在している。よって自分の価値観が社会的に間違っていると指摘されたならば、いくら個人的に正しいと思っていなくても間違いを認める必要がある。

コメント [y46]: 指摘は個人が行うものなので、その個人が間違っている可能性があります。

4月20日の学生からのコメントとそれへの対応を見ると、「根拠がない」、「具体的に書いてください」という指摘が多かった。「~と思います」はすぐに使うのを避けることができるが、自分がなぜ興味を持ったかなど、根拠をつけて具体的に書くことは、とても難しい。それは、今まではその理由をなんとなくで済ませてきたが、これからは理由をつける癖をつけるようにしなければならない。「~と考える。なぜなら~と思うからだ」では客

観性がない。(山口裕之、学生からのコメントとそれへの対応、http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/shin-kokusai/philosophy/2018/20180420comments_PH.pdf、26 ページ、2018/05/08)

を見て、自分もよくこの書き方をするが、これでは根拠にならないと気づけてよかった。ほかの人のコメントを見て学ぶことがあると山口先生はおっしゃっていたが、自分の身をもって改めて知った。これからはきちんと見ていきたい。

ぜひそうしてください。

今回の講義で個人の価値観と社会的規範について学んだ。個人の好み=正しさではないということに私は賛成だ。それは宗教間の問題を考えると明らかだ。自分の信仰する宗教にとって大切なものが他の宗教でも同様とは限らない。しかし、それが他の宗教を批判する理由とはならない。好みの違いで他者を誤った考えだとするのは間違っていると考えた。しかし、大抵の人は社会的に許容された好ましいものを選ぶ傾向がある。また、逆に一部の人はほとんどの人が価値を認めないものを好むこともある。後者は処罰を受けることが多いのだが、それは社会的規範から外れているからだ。社会的規範の中で自分の好みを選択することは許されるのだと思う。

社会的規範に反することがない個人の好みものを選択(選好)することは誤ったことではない。しかし、それが正しいとは限らない。では正しいものとはどう選択するのだろうか。私は最終的に大勢の意思が反することのないものになってしまうのではないかと考えた。しかし、その場合少数の意思は社会的規範に反しなくとも間違っただけのものになってしまうのではないか。

コメント [y47]: 具体的にどのような場合のことを考えていますか?

神が存在するかは、自然科学では知ることができない。新しい話を聞いても自分のドクサに取り込まず理解することが異文化、他者理解である。また正しさと価値観は別物。稀に社会に全く価値を認められていないものを好む人がいるが、社会的に禁止されているものを愛好する人は処罰される。よって正しいと思うことと、正しいという事実は別。社会全体が過っている場合があるが、その時に警鐘を鳴らすのが哲学である。だが、多数決では多数派の専制になる場合がある。

宗教戦争は、元々利権や利益のために起こっている。価値観が違う人とは、対話をして相互理解を図る。

正しさは万国共通の普遍のものであると学んだが、この正しさの考え方は人間がもともと有しているものなのだろうか。

野生の中で野生動物に育てられた子供は、人間間での社会性や基本的動作や考え方を有していない。だが、社会学で人間は社会によって創られると学んだ。ならば野生で育った子供でも、正しさについては社会の中で育った人間と同じなのだろうか。もし持っていないならば、正しさは**社会があつてこそ**のものである。

コメント [y48]: 社会無くして人間はありませんから、「社会があつてこそ」ということと、「人間だからこそ」ということは、ほとんど同じ意味になってしまいます。

今回の講義では、前回の講義に続き主に認識について語られていた。

まず、認識というのは普段使っているその人それぞれがそれぞれの理解している多少誤解を含んだものではなく、哲学では英語でいう **knowledge**: 「正しい知識 **truth**」 のことであり、正しさが普遍的であったならみんなが同じことを認識するはずだと考えられるもので、例えば、猫を見て犬だと言ったら猫が急に犬に変わるわけではないようにみんなが正しいとして認識しているものだということを学びました。

また、正しさと価値観はべつなものであり、個人の価値観はほとんどの場合、「社会的に価値を認められたもの」の中からどれかを選ぶかという好みの問題であるということ学んだ。ただまれに社会的に全く価値を認められていないようなものを愛好する人もいるがそういう人は処罰されるということ学んだ。

デカルトは、正しい知識をどのようにしたら持つことができるか考えた。

デカルトが生きた頃、レンズや光のしくみの研究が進んだ。感覚は物そのものではなく、**脳(こころ)**が構成したもの。

私は、このデカルトの考えに納得できる。だから、**現代社会においてもこのように、感覚は物そのものではなく、脳が構成したものという考え方で世の中が成り立っているのかどうか疑問に思う。**私は、今の現代社会はこのような考え方であると予想する。なぜなら、人間がものを認識すること、考えること、行動することは全て脳が関わっていると言われているからだ。

コメント [y49]: 疑問の内容がよく分かりません。

今回の授業では、「認識」という言葉は、哲学的な認識と私たちが日常的に使う認識で意味合いが異なることを学んだ。哲学的な認識は「正しい知識」という意味だが、私たちが普段使う認識は「個人的見解」である。また、アリストテレスやデカルト、カントなどの思想家たちの存在論や認識論を学んだ。さらに、正しさと価値観は別ということも教わった。国が違えば価値観は変わるという人もいるが、価値観が変わっているのではなく、国

にかかわらず共通する価値観の中で、どの価値観がより好まれるか、という好みが国によって違っているだけである。また、異文化理解、他者理解とは、新しい話を聞いても自分の「ドクサ」に取り込まず、常識を否定するような事実や主張でも理解することだと学んだ。

異文化理解する上で大切なものは多面的に物事を見ることができる目である。例えば、アイヌ民族の人々の文化にはイオマンテという儀式がある。クマを殺し、その魂のカムイを死をもって神々の世界に送るという文化だ。この文化について、殺されるクマがかわいそうだという人もいるだろう。だが、この文化はアイヌの人々にとって大切にされてきたものだとして受け入れることが大切なのである。自分たちのものの見方から離れて、アイヌの人々の目線でこのイオマンテという文化を受け入れるべきである。

コメント [y50]: それはそのとおりですが、現在、アイヌ文化はほとんど破壊されつくしており、「アイヌ語」は世界の中でも最も消滅の危機に瀕した言語のひとつとされています。

個人が「正しいと思う」ことと、「正しいこと」とは別である。個人の価値観や思いは、社会的・哲学的に正しいかどうかを判定されるべき対象であって、正しさの根拠にはならない。

世の中では何かを決定する時、多数決で決めることが多い。でもそうすると、少数派の人たちの個人的な意見はかき消されてしまう。全員の意見を聞いて採用することは不可能であるが、お互いの意見を聞いて相互理解に努めることが大切である。

要点

日本語の認識 **knowledge** と **belief** の両方の意味で使うが哲学では反対概念

人それぞれは戦前の価値観の押し付け、権力による強制への反省

社会全体が間違っているときに警鐘を鳴らすのが哲学

正しさが普遍的だとするならば、みんなが同じことを正しいと認識するはず

真理を知るといふみならその通りだが、個人的な解釈という意味なら人間は誤解したり

間違っただけを信じたりする

意見

自分の思い込みだけで物事を考えるのではなく正しい知識を身に付けて生活したい

箇条書きはやめましょう。

コメント [y51]: これは「意見」でなく「決意表明」です。

今日の講義では認識論から存在論についてと正しさについて学んだ。

一つ目は認識論と存在論についてである。パルメニデス以来、哲学は存在とは何かについて考えてきた。この頃は存在論であり、パルメニデスが「一にして不変」、デモクリトスが「多数の不変」、プラトンが「個物の背後に普遍的なアイデアが実在する」、アリストテレスが、「個物は素材の形で構成される」と言った。

存在論から認識論に転換したのはデカルトの頃である。デカルトは正しい知識とはどのようなしたら持つことができるようになるかと考えた。17世紀では望遠鏡などによって目では見えないものを見ることができるようになった時代でもあった。レンズや光の研究が進み、眼の仕組みの研究も進んだ。そこから、感覚は物そのものではなく、脳が構成したものであるというふうに言われた。

20世紀に入ると相対主義が流行した。サピア・ウォーフの仮説、ソシュール言語学、文化人類学などが挙げられる。この相対主義の流れの先に人それぞれ理論が存在する。加えて1970年代以降、認知科学の発展により、人類の認識の普遍性が強調されるようになった。チョムスキーの普遍文法、バーリンとケイによる色彩語研究などがここに挙げられる。

次に正しさについて学んだ。価値観と正しさは別であり、個人の価値観というのはそのほとんどが社会的に価値を認められたものの中からどれを選ぶかという好みの問題である。稀に、社会的に価値を認められていないものを好む人もいる。しかし、社会的に禁止されているものを愛好する人は処罰される。個人が正しいと思うことと正しいことは全くの別物であるからである。個人の価値観や思いは社会的・哲学的に正しいかどうかを判断されるべき対象であって正しさの根拠にはならないのである。

現代の社会的・哲学的価値観と中世や近世などの社会的・哲学的価値観というものに違いがあったのか。もしあったとすれば、私は文明開化が始まった時に西洋の新たな考えが日本に流入したことで日本の旧来の価値観が多少なりとも変化したと考える。

今回の授業では、前回の授業の要点や価値観は好みの問題で、正しさとは別のものであるということや、「起こっている事実」と「正しいこと」は違うということ学んだ。パルメニデス以来、「存在論」について考え、17世紀には「認識論」について、20世紀には「相対主義」について考えられた。その後、1970年代以降には認知科学の発展により、人類の認識の普遍性が強調されるようになった。

授業を受け、私はチョムスキーの「普遍文法」が気になった。私は今まで言語は国によってそれぞれ異なるものであり、普遍性があると考えたことがなかったからだ。「普遍文法」には、言語は人間の生まれもったものであるという考え方があり聞き、動物の意思疎通の仕方を調べた。人間以外の動物は、「有限個の鳴き方(肉食獣がきたと警告する叫び、自分のテリトリーだと主張する叫び、等)、なにかの規模を知らせる連続的なアナログ信号(たとえば、仲間に蜜のありかを知らせる蜂のダンスは、蜜の量が多いと動きが激しくなる)、あ

コメント [y52]: 質問する理由を書いてください。

コメント [y53]: 仮定で考えても仕方ありません。

コメント [y54]: 「ある程度」などと同様で、レポートで書いてはならない言葉の一つです。

コメント [y55]: そう考える根拠を書いてください。

コメント [y56]: どうして「言語は人間の生まれつき」ということから、「動物の意思疎通を調べた」のか、つながりがわかりません。

る主題をランダムに変化させる(鳥はさえずるたびに少しずつ旋律を変える)』1 といった 3 つのいずれかで意思疎通を図る。

このことから、人間以外の動物はコミュニケーションのために言語を使うことがないため、言語の使用は人間特有のものであり、人間の性質である。

注 1 スティーブン・ピンカー著、椋田直子訳『言語を生み出す本能(下)』,NHK ブックス, 1995 年

コメント [y57]: ピンカーもよいですが、山口裕之『人間科学の哲学』(勁草書房) もお勧めです。

パルメニデス以来、哲学は「存在」とは何かについて考えてきた。「存在論 Ontology」は 17 世紀につくられた言葉である。Ontology とは様々な分野の議論を集めたものをいう。パルメニデスは「一にして不変」と考えた。20 世紀になり「相対主義 Relativism」が流行した。また言語によって文化・伝統も変わるというが、言語は普遍的なもので根本的には変わらない。

正しさと価値観は別物である。また個人が思う正しさと社会的に正しい、個人が思う価値観と社会的な価値観も別である。たとえば 2 つの物事が両方ともポジティブな価値を持っていても違いはそのどちらがより好まれるかという点にある。まれに、社会的に全く価値を認められていないようなものを愛好する人もいる。しかしそういった部類の人には社会的に禁止されているものを愛好するため、処罰される。これを「間違った価値観」という。また、個人の価値観や思いは、社会的・哲学的に正しいかどうかを判定されるべき対象であり、正しさの根拠にはならない。

17 世紀に存在論(Ontology)という言葉がつくれ、パルメデス以来、哲学は「存在とは何か」を考える学問であった。1917 世紀になり、デカルトによって存在論(Ontology)から認識論(Epistemology)へと変換され、「正しい知識をどのように持つことができるか」が考えられるようになった。そして感覚は物そのものでなく、脳が構成したものであるとされた。カントは「物自体 Ding an sich は認識できない」としたが、認識枠組みは「人類普遍」であると考えた。20 世紀、相対主義 Relativism が流行した。例としてサビア・ウォーフの仮説やソシュール言語学などが挙げられる。他にも哲学者たちは様々な考えを示した。パルメニデスの「一にして不変」、デモクリトスの「多数の不変」、チョムスキーの「普遍文法」、バーリンとケイの色彩語研究などだ。個物への考えとしては、プラトンは個物の背後に普遍的なアイデアが存在するとし、アリストテレスは個物は素材と形(普遍的な形相)で構成されるとした。

新しい話を聞いても、自分の「ドクサ」に取り込んでしまう人が多いが、自分の常識を

否定するような事実や主張について理解するのが、「異文化理解・他者理解」である。また、「価値観」と「正しさ」は別であり、個人の価値観は、ほとんどの場合、「社会的に価値を認められたもの」の中からどれを選ぶかという「好み」の問題である。「社会的な価値観の違い」と言われるようなものも、おおむね同様である。まれに、社会的に全く価値を認められていないようなものを愛好する人もいる。しかし、社会的に禁止されているものを愛好する人は、処罰される。つまり、「間違った価値観」があるのだ。そもそも、個人が「正しいと思う」ことと「正しい」ことは別であり、個人の価値観や思いは、社会的・哲学的に正しいかどうかを判定されるべき対象であって、正しさの根拠にはならない。もちろん、犯罪が多発しているからといって、犯罪が正しいことにはならない。「事実」と「正しいこと(なすべきこと)」は違うからだ。

哲学という言葉のとらえ方にも歴史があり、先人たちの考えがあって、現在の「哲学」なるものになったのだと知った。また、自分の考え方と異なるものを受け入れることと共に、正しいことを見分ける力を身に付けていくことが重要だ。

哲学用語の「認識」とは、Knowledge「正しい知識 Truth」である。日本語の「認識」は、Knowledge と Belief の両方の意味で使うが、哲学では両者は反対概念なのである。ここで、哲学における Belief は社会全体の思い込みや俗説、つまり doxa を指すのだが、この doxa はプラトン哲学のポイントの一つとなり、プラトンは「社会全体が過っている場合」に警鐘を鳴らすのが哲学であると考えた。

存在論から認識論への展開として、まずアリストテレスは物自身に形相があると考え、存在とは何かを考える Metaphysika から存在論である Ontologia へ転換させた。次に、デカルトがどうしたら正しい知識が持てるのかを考え、感覚は物そのものではなく脳(心)が構成しているとし、Ontology から認識論である Epistemology へ転換させたのである。その次に、カントは「物自体 Ding an sich は認識できない」としたが、認識枠組みは「人類普遍」と考えた。

私は今回の講義で、「認識」という言葉が様々な意味・ニュアンスを持つこと、時代の移り変わりにより、物に対するとらえ方が変化してきたことが理解できた。

本日は、認識の概念について、存在論から認識論へ、神の存在、正しさと価値観の 4 つを学習した。

まず、認識の概念についてだが、哲学用語の認識は、日常語の個人の解釈という意味とは逆で、正しい知識という意味である。そのため、意味を取る際には注意が必要である。

存在論から認識論へでは、Metaphysika について研究した学問が、Ontologia 則ち即ち存在論であるようだ。デモクリトスは「多数の不変」と考えたが、これはアトムの間空間については説明できない。それに対して、パルメニデスは「多数の不変」の「あるものはない、ないものはある」という矛盾のために「一にして不変」と考えた。また、プラトンは「個物の背景に普遍的アイデアが実在する」と考えたのに対し、アリストテレスは「個物は素材と形で構成される」と考えた。これは、例えば犬を認識させるのは、犬に関するアイデアまたは犬そのものの素材や形であるという違いのようだ。このように「人間は脳が作ったイメージを見ている」という考えが加わり、Ontologia は Epistemology 則ち認識論となった。さらに、言語や色彩との関係の研究もされる。

神の存在については、自然科学は神の存在の下に成立したため疑い得ないという。

また、正しさと価値観は別である。「正しいと思う」「正しい」と区別されることを理解した。つまり、好みと価値観と正しさと事実はすべて別であるようだ。しかしここで、「価値観は好みである」ということと「好みは人それぞれだが価値観は人それぞれでない」ということは対立している。後者に従えば前者は価値観は好みであると断定できないはずだ。このことに関して、価値観は好みであるとはいえ、イコールでは結べないということだろうかと考えた。価値観は好みの影響を受けるが、最終的にみんな同じに帰着するという事ではないかと考えている。

コメント [y58]: 科学は自然界の内部の現象を研究するので、自然そのものを創造した原因については原理的に考察することができない、と言いました。

コメント [y59]: 一般に「価値観の違い」と言われることは、「好みの違い」という意味だ、と説明しました。そして、「個人の好み」と「正しさ」は別だ、とも説明しました。

「認識」とは、「正しい知識」と「個人的な解釈」という全く逆の意味で使われているが、哲学用語での「認識」とは「正しい知識」の意味である。プラトン哲学にも「ドクサを脱して正しい知識へ」とある。しかし、「個人的な解釈」という意味なら、人間は誤解したり、間違っただけを信じたりする。そうならないために、社会全体が過っている場合に警鐘を鳴らすのが、哲学である。

また、パルメニデス以来、哲学では「存在」とは何かについて考えてきた。アリストテレスの形而上学から存在論へと、更にデカルトによって存在論から認識論へと転換された。ここにおけるデカルトの認識論は、「正しい知識」をどのようにしたら持つことができるか考えたものである。

また、学生のコメントより、「価値観」と「正しさ」を混同している人を見受けられる。しかし、個人の価値観というのは「社会的に価値を認められたもの」の中から選ぶ「好み」の問題であることがほとんどだ。「社会的な価値観の違い」というのも大きな違いはないのである。しかし、中には社会的に禁止されたものを愛好する人もいるが、それは処罰の対象になる。それは「間違っただけの価値観」があるということだ。本人にとって「正しいと思う」ことが、必ずしも「正しい」とは限らないのである。

また、「犯罪が多発している」からといって、「犯罪が正しい」ことにはならない。これ

は「事実」と「正しいこと」とは違うことを表している。犯罪が多発する社会にも、犯罪を禁止する法律はあるのだ。

自然科学では、神の存在は証明も否定もできないが、これを「自然科学から見て神は存在しない」と自分の「ドクサ」に取り込んでしまう人が多い。しかし、自分の中の常識を否定するような事実や主張について理解するようにすべきである。例えば、自分が神の存在を信じないのは構わないが、人が神を信じているのを否定するのではなく、なぜ信じているのか理解をするべきであるというのは、非常に重要である。それが異文化理解や他者理解に繋がるからである。「ドクサ」を脱して正しい知識を身につけることで、今後の人生での人付き合いも円滑になるだろう。

今回の授業は前回の小テストの解説、価値観と考え方の違い、社会的な正しさの判定、価値観を異にする人との相互理解の方法についての授業だった。

前回の小テストの解説を聞いていて、ふと小さい時に考えていたある事を思い出した。「実は人によって眼球に捉えて見ている目の前の風景は人によって見え方が違うのではないかと。僕が普段から「青」として認識知覚しているが、知覚している色は、もしかしたら別の人には僕が「赤」として認識知覚している色に見えるのかもしれない。しかし社会的にそれは青と言われている色だから、僕は、僕が「青」と考えている色で、別の人は、僕が「赤」と認識している色を青と呼んでいるのかもしれない。だって確認のしようがないでしょう。哲学の授業とは関係のない話かもしれないが、サピア・ウォーフの仮説の「色など基本的な知覚は〜」といった話の中でふと思い出すことになった。

今回の授業で疑問に思ったのは「社会的な規範の正しさ」はどのようにして決まるかということだ。授業では社会規範について多数決で決めてしまえば、「多数派の専制」になる場合があるということだった。では、有史以来、人間はどの湯にしてそれを決めてきたのだろうか。単純に話し合いで決めてきたのか。それとも、社会の雰囲気自体がそういった考え方を醸成していったのか。気になった。

今回の講義も「正しさ」と「好み」の違いについてであった。今回の講義を聞いていてもレポートを見ていても未だに頑固に違いを認めない人が多くて驚いた。かく言う私もこの違いを理解しきったとは言えないが、もう流石に「人それぞれだ〜」などと意見するつもりはない。なぜ未だに認めない人が多くいるのだろうか？

一応私達も大学生ともなったので講義内容を全く理解していないという事は考えにくい。私達が理解出来ていないのはむしろ「議論」の場としてのこのレポートなのだ。

コメント [y60]: ジョン・ロックが提起した「逆転クオリア」の議論を参照してください。ロック『人間知性論』第2巻32章15。クオリアや知覚についての哲学的議論を詳しく知りたい場合は、山口裕之『認知哲学』（新曜社）を読むことを勧めます。

コメント [y61]: どんなことを書いてもらってもかまいませんが、授業との関連を無理やりでもいいから付けるようにしてください。

コメント [y62]: 質問する場合には、なぜ疑問に思ったのか理由を説明し、自分なりの解答を主張し、その根拠を示してください。

「日本人は議論が苦手である」「議論」という言葉には攻撃的な含意が見て取れる」(小笠原泰「HUFFPOST BLOG 日本人は、なぜ議論できないのか」-小笠原泰-5/8 閲覧)からも分かるように日本人にとって議論は攻撃的に感じるのである。

さらに我々学生は今まで議論の場をあまり経験していない。

以上のことより、経験の少ない我々が突然にこのような議論の場を設けられるとどうしてよいか分からないのでとりあえずイメージとしてある「攻撃的」なものになり相手の意を汲まず非難ばかりするようになってしまうのだ。

本レポートは、レポートの書き方だけでなく議論の仕方も学んでゆける優れた実践練習の場である。しかし、その前に我々学生が議論とは何かという事に気づかなければ全く無駄なものに終わってしまうのではないだろうか。

コメント [y63]: この人が何者なのかは調べましたか？

コメント [y64]: ではどうすればよいのか、教えてください。

私は今回の授業で「正しさ」と「価値観」が違うことを学んだ。前者は実際の事例や、個人が正しいと思っていることとは違っていることもある。それに対して後者は、個人が社会的に価値を認められた事柄の中から、どれを選ぶのかという「好み」の違いであると学んだ。

今回の内容「存在論から認識論へ」

アリストテレスによる転換:Metaphysika(形而上学)から Ontologia(存在論)へ

デカルトによる転換:Ontology から Epistemology(認識論)へ

Epistemology は 19 世紀になって作られた言葉である。

パルメニデス以来、哲学は「存在」について考えてきた。パルメニデスは、物の存在は「一にして不変」と考えた。

それに対し、デモクリトスは「多数の不変」、プラトンは「個物の背後に普遍的なアイデアが実在する」、アリストテレスは「個物は素材と形相で構成される」とそれぞれ考えた。

そして、17 世紀に存在論(Ontology)が提唱された。

加え、20 世紀になると、相対主義(Relativism)が流行するようになった。

授業等で新たな話を聞いても、自分の「ドクサ」に取り込んでしまう人が多い。自分の常識を否定するような事実や主張について理解するように努めなければならない。それがすなわち、「異文化理解・他者理解」へとつながる。

正しさと価値観について

価値観と正しさは別物である。個人的な価値観は大抵、「社会的に価値を認められたもの」の中からどれを選ぶのかという「好み」の問題になる。「社会的な価値観の違い」と言われ

るようなものもおおむね同じである。

よって、個人の価値観は「正しさ」ではなく、「好み」として違いが現れるのである。他人の価値観が正しいとはならないし、自分の場合もまた然りである。だからこそ自分の「ドクサ」に取り込もうとせず、相手を理解する努力が必要なのである。

箇条書き風です。ひとつの文章になるように書いてください。

今回の授業では、認識、存在論から認識論、正しさと価値観について学んだ。

哲学上での、「認識」は正しい知識と決まっている。また、哲学は大勢の人が正しいと思いついて入っている考えを哲学の視点から見て、見直し直す学問である。

アリストテレスは、個物は素材と形(普遍的な形相)で構成される、たとえば、りんごを例えとして考えると、「りんごがあるはリンゴの果肉とリンゴの形でできている」と捉えた。

しかし、デカルトはりんごが見えるのは脳が構成したものではないかと捉えた。

一方でカントは、「物自体は認識できない」と考えたが、認識の枠組みそれは「人類普遍」であるとした。

サピアとウォーフは「言葉があるから区別がつく」とした。

正しさと価値観について、個人が「正しいと思う」と、「正しい」ことは別であり、正しいの根拠にはならない。そして、授業で例に挙げていた「犯罪が多発しているから」と言っても、「犯罪が正しい」ことにはならない、これは「事実」と「正しいこと(なすべきこと)」は違うことを示している。

本日は「正しさと価値観」について学んだ。山口教授が、人々はよく「人それぞれに正しさは異なる。人それぞれに価値観が異なるからだ」と言うとおっしゃっているように、世間一般では「価値観」と「正しさ」を同一視する人が多い。個人の価値観はあくまでも「個人の好み」の問題である。つまり、「価値観」と「正しさ」は別のことなのである。

しかし、「それぞれの国の価値観」があるがその価値観はなんなのか、という疑問が生まれる。それについてはこう解答できる。例えば、山口教授のレジュメに、「例えば日本では周りに合わせるが良いことで、アメリカでは自分のことは自分で決めるが良いことである、など、やはり価値観の違いがあるのではないか」という質問が書かれている。

しかし、これもどちらのことがより好まれるかということであって、この二つの国では両方の態度が「正しいもの」と考えられている点では同じで、「価値観の違い」とは、多くの場合、「社会的に認められたことの中からどれを好むか」という違いであるが一方のことに傾倒しているわけではない。だから、「価値観」と「正しさ」は同じものではないというこ

とがわかる。

ここで興味深いのが、全ての価値観を自由に選択できるのかということだ。しかし、「価値観」とはあくまでも「社会的価値が認められたもの」である。よって、社会的に認められていないもの、例えば、麻薬などは当然処罰されることとなる。しかも、「正しさ」は概ねどこの国でもほぼ一致しているものである。

個人の価値観は、「好み」であって「正しさ」ではない。社会的規範は一般的に「正しさ」の根拠となるが、社会的規範自体が過っている場合もある。価値観の異なる意見を聞いても、自身の常識にあてはめて判断するのでは異文化理解、他者理解はできない。自身の常識を否定する言を取り入れてこそ理解に繋がるのだ。また、考えが異なる人に自身の考え方を押し付けることはできない。対話を通しての相互理解を図る必要がある。

多数決では、「多数派の専制」になる場合がある、と山口教授は述べられた。民主主義の根幹は多数決にあるのではなく、人民一人一人がよりよい社会を形成するために努力することにある。しかし、人民一人一人が社会について考えるよう促すことは、人民に対して高度な自立性を要求することでもある。一方、独裁政権下では、人民は強力なリーダーシップを発揮する人物の下で盲目的に命令に従っていけばよい。大抵の場合、独裁政権は多くの人民の消極的賛成から生じる。日本では若者の投票率の低下が問題視されて久しく、平成 29 年の衆議院議員総選挙における 10 歳代の投票率は 40.49%、20 歳代では 33.85%に留まった。(「総務省 | 国政選挙の年代別投票率の推移について」http://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/sonota/nendaibetu/(最終閲覧日:2018 年 5 月 8 日))。また、日本の国会議員の世襲率は国際的に見ても高い。民主主義を謳ってはいても、実際には一部の特権階級が権力を握る貴族制へと変化しつつあるのだ。

個人の価値観は「好み」であって「正しさ」ではなく、「社会的に許容された好ましいもの」を選択する。「社会的に許容されないもの」を愛好するものは処罰される。社会的規範は通常「正しさ」の根拠になるが、社会的規範そのものが誤っている場合もある。

意見:テロリスト達は大人だからもう違う価値観を刷り込むのは難しいとあり、対話をして相互理解に努めるべきとあるが、対話を受けようとしないなら無理矢理にでも価値観を刷り込むか武力で抑制する以外手段はないのではないか。

コメント [y65]: この点については山口裕之『人をつなぐ対話の技術』(日本実業出版)を読んでください。

コメント [y66]: そう考える理由を説明してください。

私は今回の授業を欠席してしまったので、友達に授業内容を説明してもらったところ、主に「正しさ」と「価値観」の違いについてであった。個人の価値観は、「社会的に価値を認められたもの」の中からどれを選ぶかという、「好み」の問題であるが、それは個人が「正しいと思う」ことであり、それが「正しさ」を左右するとはいえない。個人が「正しいと思う」からといって、その考え方が誤っている可能性は高く、また、個人の価値観や思いは、社会的・哲学的に正しいかどうかを判定されるべき対象であって、正しさの根拠にはならないからだ。

さらに、通常その個人の価値観や思いの「正しさ」を判定するのは、社会的規範であるが、社会全体が間違いを犯してしまった場合、社会的規範を検討し、批判するために存在しているのが倫理的な理論なのである。社会的規範の正しさは、「多数派の専制」を避けるべく、多数決で決めるのではない。哲学・倫理学は、人間本性や論理、慣習、法などを根拠として、「正しさ」を考察し、説得と合成を量る。しかし、これら一つ一つが絶対的の根拠を持っている訳ではなく、体系として形になった時、初めて力を持つのだ。これは、「人間が正しいと思っていること」の中から、「本当に正しいこと」を探そうとする作業なのだ。

社会全体が間違っている時に、社会に対して警報を鳴らすのが哲学なら、それができるように今ある知識の量をさらに増やし、それらを知識の体系として形にしていくことが必要になってくる。そして、個人の価値観だけで世の中を見るのではなく、「正しさ」の根拠となる社会的規範をしっかり理解することが重要になってくるのである。

今回の授業は、サピア・ウォーフの**仮説仮説**とソシユール言語学など、二十世紀に相対主義が流行したという話と、学生のコメントに対する先生のコメントであった。自然科学はキリスト教における神の創造説を前提として成立したのにも関わらず、学生が「自然科学的に神は存在しない」と依然として主張するのは、新しい話を聞いても自分の思い込み、「ドクサ」に取り込んでしまうからであり、自分の常識を否定するような事実や主張を理解する必要がある。私の祖父は、国際情勢について、よく偏見を持った意見を言うが、それも、せっかく知識を得ても**自分のドクサに取り込んで判断**しているからであり、その意見には客観性がない。異文化理解は、自分の立場や意見からだけで考えるのではなく、別の視点から物事を捉えることが重要なのである。

今回は前回授業の復習と主に正しさと価値観についての授業だった。価値観と正しさは別であるので、人それぞれで価値観が異なるから人それぞれで正しさが異なるといった事は無い。また個人の価値観とは好みの問題であるということ。そして個人の価値観や思い

コメント [y67]: それはあなたにとっても友達にとっても大変結構なことですが、授業ファイルをウェブに掲示していますから、そちらも参照してください。

コメント [y68]: 内容をもう少し具体的に書いてください。

コメント [y69]: さらに人は、自分のドクサに一致する情報ばかりを好んで集めるという習性があります。心理学で「確認バイアス」と呼びます。

は社会的、哲学的に正しいかどうかを判定されるべき対象であって、正しさの根拠にはならない。また事実と正しいことも違うとのことだった。

正しさと個人の価値観を同じものとして捉えてしまう原因は何なのだろうか。個人の価値観が好みの問題であるなら、自分が好きなものと正しさを結びつけてしまうのはおかしい。にも関わらずそのような考え方が存在するのは、人は自分自身が間違っている、おかしいと思って生きていく事はあまり無く、よって自分が社会的に価値を認められていないようなものを好むはずがない、自分が好んでいるものの価値は社会的に認められたものであり、それに価値を見出す自らの価値観は正しいと考える。その結果価値観と正しさまで同一視してしまうからなのだろうか。

「自分が正しいと思う」ということと、「本当に正しい」ということの区別をつけるのは、実際問題として難しいです。みなさんには、それが違うんだよ、ということを伝えていますが、みなさんが「正しいと信じ込んでいること」が実は間違いなんだということを納得してもらうのは難しいです。

前回と今回の講義では、認識という日本語は、「正しい知識」、「個人的見解」とは全く逆の意味で使われ、17-19世紀には、「正しい知識」をどのようにしたら持つことができるかを考え始めたことを学んだ。その背景には、望遠鏡や光、レンズ、目の仕組みについての研究が進んだことがあった。その結果、感覚は物ではなく、脳が構成したものと考えるようになった。また、カントは認識の枠組みは人類普遍のものであると考えた。そして20世紀には「相対主義」が流行し、私が受験期によく目にした、「まず概念や対象物記号としての言葉が先にあり、それと対応する形で記号としての言葉概念や対象物が作られる」という「ソシュールの言語学観」へと至った。

この考え方を否定する立場から考えてみると、言葉が存在してから初めて概念や物事が誕生すると言える。私はこの考え方はほとんどの人間にとっては正誤はわからないと思う。なぜなら私たちは母語として日本語を習得している状況であるため、言葉がない世界は経験できないため、この考えが本当か確認することはできないからだ。

今回の授業では、価値観と正しさは別物だということを学んだ。そして価値観は社会の中で認められた中から個人の好みで選ばれていると学んだ。そうすると、社会規範に従おうとすることこそが個人の価値観や思い込みの正しさから脱却する指針になるのでしょうか。

デカルトの時代に、レンズ、光、眼のしくみの研究が進んだ。デカルトは、感覚は物そ

コメント [y70]: この点については様々な研究があります。山口裕之『人間科学の哲学』（勁草書房）を読んでください。

コメント [y71]: なぜそうなると思うのでしょうか？

のものではなく、脳が構成したものと考えた。例えば、色や音の波長の違いによって、人間は識別している。また、1970年代以降、認知科学の発展により、人類の認識の普遍性が強調され、バーリンとケイによって、色彩語が研究された。人間は、言語が違っても、見えている色が異なることはない。

そこで、私は、なぜ色が見えるのかということについて、詳しく調べてみることにした。キャノンによると、「物体の色は、その物体の性質によります。たとえば、光で照らして赤く見える物は、赤い光だけで照らすとより明るく見えますが、青い光だけで照らすと暗く見えます。このように、普通の状態でも赤く見える物は、赤い光を最も強く反射して、他の色の光を吸収してしまうのです。つまり、人間は、物体が『何色を強く反射するか』で物の色をみていることになります」と述べられている(キャノン「キャノン:技術の紹介」http://web.canon.jp/technology/s_lab/light/001/09.html#title-list)。つまり、強く反射したものの波長の違いによって色が異なるのである。そして、人間はその物の色が見えるのである。

今回の講義は、先ず、前回の講義を受けての生徒のコメントとそれに対する応答を取り扱った。この講座で以前も取り扱った正しさと価値観、社会的規範と「正しさ」に関する考察は、**的を射た考え**であり、非常にためになるものだ。

次に、存在論から認識論への展開を取り扱った前回講義の補足説明を行った。20世紀に流行した**相対主義(Relativism)**への批判論者として**チョムスキー**、**バーリン**と**ケイ**が紹介された。前者は「**普遍文法**」という**本を書き理論を提唱し**、世界の言語には共通した文法(単語で文を構成・単語に主従関係がある)があることを、後者は**色彩語研究**をし、人類は共通した**色彩感**を持つことをそれぞれ解明した。さらに**70年代以降**に発達した**認識認知**科学の影響を受け、現在では、**相対主義**はその影響力を失っている。この事実は、それまで私が読んできた人文系の論文・評論には一切触れられておらず、更には、**高校の公民系**の時間でも一度も言及されていないために、**相対主義**は正しい学説であると誤認していた自分を驚かせるものであった。

このことは総合科学入門講座で言及された「**多面的に一つの問題について考察すること**で、その問題のより深い理解が可能になる」ということを実感させるよい体験になった。なぜなら、私が抱えていたこの誤認は、**多面的な視点**の導入で解決され、さらに文化の**共通性**という問題について、より深い理解が可能になったからだ。だから、**多面的な視点**で一つの問題を考察することは何かの問題について検討するときに大切なことである。

コメント [y72]: 「そこ」の指示対象が不明です。どうして「なぜ色が見えるのか」ということについて、その中でも具体的にはどういう問題について調べてみることにしたのか、説明してください。

コメント [y73]: ここで書かれていることは(おそらくキャノンのHPで書かれていることの全部を合わせても)「色なぜ見えるのか」という問題に対する解答としては全く不十分です。たとえば、蛍光灯の下でも電球の下でも、薄暗い部屋でも、「同じ色」が見えます。これは、単に反射光の波長では説明できません。知覚心理学の授業で扱っているはずですが。

見えるということに関するさまざまな哲学的問題については、山口裕之『**認知哲学**』(新曜社)を読んでください。

コメント [y74]: 具体的にどんな考えなのか説明してください。

コメント [y75]: 高校まででは心理学は教えませんからね。

哲学の文献において「認識」は「正しい知識」という意味で用いられる。デカルトはどのようにしたら正しい知識をもつことができるかと考えた。そのころはレンズや光、目の仕組みについての研究が盛んで、研究が進むと「感覚は物そのものではなく、脳(心)が構成したもの」と考えられるようになる。また、カントは「物自体は認識できない」と考えた。これらの論を「認識論」と呼ぶ。

20世紀になると、相対主義が流行するが、1970年代以降認知科学の発展により人類の認識の普遍性が強調されるようになった。正しさも国によらず普遍であるが、それぞれ違うと誤解されるのは、国によって好まれるものの傾向が違うからだ。社会的に価値を認められた(正しい)ものが好まれているということは万国共通である。個人にも同様のことがいえるが、中には社会的に価値のないものを好むひともいる。それが社会的に禁止されているものであればもちろん罰せられる。禁止されていないのならそれを愛好してもかまわない。

自然科学は自然界のことを測定して探求するものでそれがなぜおこったかはわからないということを学んだ。また哲学における神は世界の第一原因としてとらえているということを学んだ。さらに新しい話を聞いても自分のドクサに取り込んでしまう傾向にあるが自分の常識を否定するような事実や主張について理解することが異文化理解・他者理解につながるということを学んだ(常識的なものの落とし穴にはまらないようにするべし)

また、価値観と正しさは別物ということを学んだ。さらに社会的に価値を認められていないものを愛好する人もいるがそういう人は処罰されるということを学んだ。また個人が正しいと思うことと正しいことは違うということを学んだ。個人の価値観や思いは社会的・哲学的に正しいかどうかを判定されるべき対象であって正しさの根拠にはならないと足りしないということも学んだ。また犯罪が多発しているからといって犯罪が正しいことにはならず事実と正しいことは違うということを学んだ。また、親は決して子供に言葉を教えているわけではなく語りかけているだけだということを学んだ。

さらに授業の中で普遍文法がでてきた。どんな言語でも単語があってそれを並べる、主語・動詞・目的語があり修飾語が変な位置につかないというものであった。私はフランス語を取っている。教えてくれている田島先生が、否定の時はNの音がでるものが多い、と言っていた。もし否定の時にNの音がつくことが共通なら普遍文法になにかしら関係するかもしれないという観点で言語の否定形について調べてみた。

まず日本語は「ない」なのでNの音がある。次にアイスランド語は「nei(ネイ)」(<https://guidetoiceland.is/ja/history-culture/the-difficult-icelandic-language> Guide to Iceland, アイスランドってどんな言語?, Kuna Yoon, 2018/5/6 アクセス)なのでNがある。次にドイツ語は「nicht(ニヒト)」(http://www.harada.law.kyoto-u.ac.jp/hdg/20_struktur.html, 文の構造, 原田大樹, 2018/5/6

アクセス)なので N がある。次にスペイン語は「no」

(<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/es/gmod/contents/explanation/041.html>,

TUFS 言語モジュール(東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」)川上茂信(東京外大), 木越勉, ビクトル・カルデロン・デ・ラ・バルカ, ルミ・タニ・モラターヤ, 結城健太郎, 鈴木恵美子, 2018/5/6 アクセス)なので N がある。次に韓国語は「照(アン)、走省(ジアン)」

(https://www.kansai-u.ac.jp/fl/publication/pdf_forum/3/075lee.pdf, 韓国語の否定表現 “照[an]1]v.s.・走省 [-ji an]” , 李潤王, 2018/5/6 アクセス)なので N がある。

ここまで見てくるとやはり否定のときには N の音がつくように思われるが中国語は「不(ブ)、没(メイ)」

(<http://oogodamasataka.com/2017/05/16/chinese-grammar-negative/>, 【中国語文法】否定文「不」と「没」の使い分け, ゴダ, 2018/5/6 アクセス)

であるし、アイヌ語も「somo(ソモ)」

(http://ainugo.ainu-museum.or.jp/pages/ainu_basic.html, アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ, 2018/5/6 アクセス)であるためすべての言語で否定文をつくる時に N の音がくるわけではないことがわかった。

したがって否定文のときに N の音が発音されるのは普遍文法とは関係ないだろう。

今回の講義では、前回の講義の復習と「価値観」と「正しさ」の違いを学んだ。

前回の講義は「認識」と、存在論-Ontology・認識論-Epistemology- についての話であった。

まず「認識」という言葉は日本語では、「正しい知識」・「個人的見解」という逆の意味で使われるが、哲学では前者の意味で使用される。存在論・認識論についての話だが、パルメニデス以来「存在」とは何かについて哲学では考えてきた。プラトンのアイデアとアリストテレスの形相は違った言葉で言い表されているが、ほぼ同じ意味である。そしてデカルトによって Ontology から、どうしたら「正しい知識」をもつことができるのかという認識論-Epistemology-の考えに引き継がれた。また、20 世紀には相対主義の考えが流行した。例えばサピア・ウォーフの仮説である、言葉が違くと世界が違って見える、というものがある。

次に「価値観」と「正しさ」の違いについて。価値観は、社会的に価値を決められたものの中からどれを選ぶかという好みの問題である。そもそも個人の価値観や思いは、社会的・哲学的に正しいかどうかを判定される対象であって、決して正しさの根拠にはならない。また、「事実」と「正しいこと」も違う。今実際に起こっている現象が「正しいこと」であるわけではないのだ。

コメント [y76]: 音の規則は、「文法」ではありません。言語音と意味との間には一定の関係が偶然以上の確率で見られることは以前から言われており、最近もそのことを検証した論文がアメリカアカデミー紀要に掲載されていました。

Morten Christiansen et al. “Sound-meaning association biases evidenced across thousands of languages”, *PNAS*, September 27, 2016. 113 (39)

10818-10823

<http://www.pnas.org/content/113/39/10818>

人間の身体構造や擬音語などから、音と意味との間にある程度の関係性ができるようです。こうした研究は、統計学的に検証するので、「例外が一つあったら否定される」というようなものではありません。

今回の講義で特に重要だったことは、「事実」と「正しいこと」は違うということである。私は、起こっている事象が「事実」ではあるが「正しいこと」ではないことがわかっていなかった。「事実」と「正しいこと」の違いについて知ることは、新しい話題や判断対象を自分のドクサに取り込んでしまわないためにも重要だからである。

コメント [y77]: 事実となすべきことは違う、という話です。たとえば、多くの人が12時に昼ご飯を食べているからといって、「12時に昼ご飯を食べなければならない」ということにはならない、ということです。

個人の価値観は、「好み」であって、「正しさ」ではない。おおむね「人それぞれ」ではなく、ほとんどの人は、「社会的に許容された好ましいもの」の中から選択する。また、「ほとんどの人が価値を認めないもの」を愛好する人もいるが、許容される。そして、「社会的に許容されないもの」を愛好する人は処罰される。

社会的規範については、通常は「正しさ」の根拠として通用し、社会的規範自体が誤る場合もある。また、哲学・倫理学は、規範そのものを論理と事実によって批判的に検討する。

また、大部分の宗教戦争については、「教派の権力」や、「利権を守ること」が目的だった。闘争に際して、教義が連帯のきずなどとして利用され、宣伝されたために、それを信じこんだ人達が、教義の違いを闘争の真の理由だと信じ込むようになった、というのが歴史的な実態だ。

そして、考え方が違う人達に対しては、対話して相互理解を図るとよい。

当たり前のことだが、授業で先生が話す哲学と我々学生が勝手に思い込んでいる哲学は全く違う。しかし、我々の授業コメントは自分が思っていることを書いてしまっているという指摘を受けた。他人が言っていることの本質を自分が知っていることと勝手にリンクさせてしまうからだろう。自分の考えと違う考えの主張を聞いたとき、自分の中の考えをいったんそばに置き、相手の主張、理由をしっかりと理解することで自分の考えをさらに発展させることができる。

コメント [y78]: そのような指摘をしたつもりはありませんが、私のどのような発言からそのように解釈したのでしょうか？もう少し具体的に書いてください。

次に社会的規範と正しさについて、学生のコメントで「犯罪が多発している社会では、道徳的な正しさは社会的規範ということにはなりえない」とある。しかし、道徳的な概念はある程度は世界共通なものであり、犯罪が多発している社会だから、我々が思う「人を殺してはいけない」、「人のものを盗んではいけない」というような犯罪に対する道徳的な一般概念は揺らぐものではない。

社会全体の思い込みや俗説がドクサとあるが、どの程度社会全体で広まっていたらドク

サになるのだろうか。

そもそも社会全体の単位とは国単位なのか、それよりもっと人が少ない集団でも社会であることにかかわらずではないか。

マイノリティの中でのドグサはドグサと呼べないのではないか。

なので、社会全体をさす時の線引きははっきりするべきだ。

コメント [y79]: これを問題にする理由を説明してください。

哲学用語としての認識とは、「正しい知識 Truth」であるのだが、日本においては「個人の解釈・信念 Belief」が混同したものが使われる。

個人的価値観は「好み」であり、「正しさ」ではない。社会規範は「正しさ」の根拠として通用するが、間違っている場合もある。そこを論理と事実によって批判的に検討するのが、哲学・倫理学である。

以下、考察とコメント。

未だに「それぞれ論」を捨てきれずにいる理由は、立場を限定した場合に、一つ一つの言葉や要素などがその立場によって変化しているからだ。人間を殺してはいけない、これは普通だと先生は仰られていたが、私はどうしても腑に落ちなかった。人殺しを望むのも自由だと言いたいわけではない。殺してはいけない人間は一体誰なのか、を問いたいのだ。敵国兵士のように武力をもった存在だけでなく、WWIIにおけるユダヤ人、ビンラディンのような武力を持たない存在も社会は殺人を許容する場合も存在する。それはドグサであると言われるだろうが、ハイデガーのように誤ったドグサと言われるものに味方する哲学者も存在する。この場合、ハイデガーの「好み」であり「正しさ」とは別という反論もあるだろう。ではケースを変えよう。「 $1+1=2$ 」が正しいとすることは、**数学的には定義不足として却下される。「 $1+1$ 」の答えは「 2 」もありうる、と言うべきなのだ。この「 $1+1=2$ 」というドグサに異を唱える数学は間違っているのだろうか。少数の価値観を間違いとするのに、本来批判対象である社会規範を論拠にするというのはいかがなものだろうか。哲学・倫理学として正しいこと、間違っていることとは一体何なのか。**

コメント [y80]: 山口裕之『人をつなぐ対話の技術』（日本実業出版）にその話を書いてありますから、ぜひ買って読んでください。

コメント [y81]: そんな数学は聞いたことがありませんが、どういう出典があるのですか？ひょっとして、クリプキの「クワス」のことが念頭にあるのでしょうか？

私は、一時的な結論であることを前提に、答えを出し続けていくことが重要であると考える。将来的に覆される可能性もゼロではないことを念頭に置いた探求こそ、ドグサに囚わずに問いを持続できる、変化に対応できる柔軟性を持つのに重要なことであると私は考えている。